ラジオの島・奄美

――「あまみエフエム」から始まる島の自文化語り ――

加　藤　晴　明

目次

1節　あまみエフエムに託されたミッション
●あまみエフエム・麓憲吾というオンリー・ワン
●あまみエフエムに託されたミッション
●開局にいたる経緯
●美意識の原点としての「結」
●麓氏の卓抜したリーダーシップ
2節　あまみエフエムの個性
●幾つもの個性が融合したラジオ局
●個性1：島口・島文化発信ラジオ
●補足：奄美の標準語教育と方言禁止について
●個性2：〈奄美のうた〉の文化発信ラジオ
●個性3：イベント発信ラジオ
●奄美豪雨災害と島外とのつながり
●補足：NHKが描いたあまみエフエム
3節　ラジオの島：4局もある島ラジオ
●島のラジオ局を支える奄美通信システム
●日本発の公営型ラジオ・エフエムうけん
●エフエムうけんの番組構成

●エフエムせとうち：ラジオの島の難問を背負って
●エフエムたつごう：もうひとつの民間ラジオ局
4節　小括：かたる・つながる・つくる・ひろがる

1節　あまみエフエムに託されたミッション

●あまみエフエム・麓憲吾というオンリー・ワン

21世紀に入り、奄美では新しいメディアの胎動が光る。そうしたメディアの生成と発展の代表格のひとつがあまみエフエムである。あまみエフエムの成功を機に、人口6万に満たない奄美大島で他にもコミュニティFMが3局たちあがった。人口比でみれば、奄美は日本で一番コミュニティFMが多い地域でもある。あまみエフエムは、〈島内のまなざし〉からみても地元で華々しく活躍する目立ったメディアではあるが、〈島外からのまなざし〉であるマスメディアや研究者からも高い注目を集めてきた。

NHKはこれまで数多くのの奄美番組を制作してきたが、「関口知宏のOnly1」という国内で活躍するオンリー・ワンな若者と出会うというシリーズ番組で、あまみエフエム代表の麓憲吾氏（1971～）に焦点を当てた番組を制作している。2回に分けて放送されたその番組では、麓氏が開いた奄美群島初のライブハウスASIVIを舞台に、「NPO法人ディ！」代表としてコミュニティFMをたちあげた麓氏の活動に密着するかたちでそのオンリーワンぶりを紹介した（衛星放送：2010年9月18日前編、25日後編）。

麓氏は、「ムーブメント」をキーワードに自分の活動を語っている。番組では、かつて方言として学校から駆逐され、使うと方言札を下げさせられるほど抑圧された島口（※奄美固有の言語・奄美語）を、あまみエフエムのラジオ放送を通じて再び生活のなかに取り入れ、島口に息吹きを吹き込もうとする試みや、音楽で島を元気にする姿が描かれている。

島を代表する日刊新聞である南海日日新聞は、江戸時代の薩摩藩による奄美・沖縄侵攻（慶長戦争）400年にあたる2009年の元旦特集号で、「薩摩侵攻400年～奄美群島のあり方を問う」という鼎談を特集記事として掲載している。鼎談者のひとりである麓氏は、ここでも「ムーブメントになっていない」ことを強調している。

> 島に生きることはすごく大切なこと。…井の中の蛙でもいい。島にこだわることが対外的な魅力だったり、いろんな力を生み出すことになると考え、島の人が島のことを知ることから始めたいと考えている。それをどうアレンジして外に出していけるのかをテーマに、島に特化したもの、島の人が喜ぶものをつくっていきたい。
>
> 僕は技術者でも技能者でもない。島が好きで島のことに携わりたいと考えて、ASIVIやラジオ局をつくってきた。ただ、「島を元気にするぞ」というパフォーマンスはしているが、ムーブメントを起こしきれていない。意識をもって「島で生きる」人を増やしていきたい。（南海日日新聞、2009.1.1）

自身の活動の起点や立ち位置をめぐるこの語りは、その他の氏の語りのなかでも一貫している。麓氏は、その強いミッションからも、数ある島語りメディアのなかでも〈文化媒介者〉としての活躍や社会的評価という点で出色の位置にいると言って過言ではない。まさに誰もが認める奄美の文化再生ムーブメントのリーダーである。「ムーブメント」を強調し、島おこしのためのメディア実践を次々と仕掛ける彼のスタンスとメソッドは、奄美で生きるという不退転の覚悟でもある。

「シマッチュの、シマッチュによる、シマッチュのためのラジオ」は、あまみエフエムが掲げた最も重要なメッセージである。オリジナルストラップには、「シマッチュとは、島出身者だけではなく、島在住の方、島

を愛する方をさします」という但し書きも付いている。

今日の奄美は、紬産業の衰退、そして奄美群島開発特別措置法（いわゆる奄振）によってもたらされる土木事業費の減少によって、経済的な危機状況が続いている。格安航空機の就航や離島ブームによって観光客が増えつつあるが、群島全域で人口減少が続いている。また、奄美大島内においても、戦前から始まる奄美市名瀬地区への都市的人口集中と人口の島外流出は、シマと呼ばれてきた自然村集落の衰退をもたらし、島口・島唄・祭りといった奄美の伝統的な生活文化の危機を招いてきた。島唄は、生活世界から離脱しつつも「教室」という形での伝承が可能となってきたが、集落の踊りである八月踊りは唄い手（唄出し）の高齢化のなかで継承の危機に直面している。

こうした危機の島で、島に帰島し、在住する中で島の再生をいかに図っていくのか、その思いが麓氏や彼を支える若い仲間達である“チーム麓”の基本スタンスである。“チーム麓”と名付けたのは、フォーマルだけでなく、インフォーマルなつながりを通じて彼と喧々諤々と討議しつつ協働する仲間たちを総称してこう名付けてみた。対外的には麓氏だけが脚光を浴びることが多いが、そうした仲間との協働がなければ、これだけ注目されるメディア事業は生まれない。

日本にコミュニティ FM はたくさんある。しかし、その事業が地域の人びとの温かい社会的支持を得て、地域にインパクトをもつ公共財として承認されるような放送局は決して多くはない。ラジオ局の成功は、メディア事業への支持のひろがりにかかっていると言っても過言ではない。

チーム麓が目指したシマッチュのラジオは、そうした奄美の人達がひしひしと感じている危機に棹さすムーブメントを目指し、「島で生きていく」人を増やすことを目指す。それは雇用の場をつくることで、島で暮らし、自ら誇りをもって島を語っていく島の担い手を増やしていくプロジェクトでもある。こうした明確なミッションが共有されているからこそ、チーム麓とも言うべき仲間の輪が生まれ、あまみエフエムを卓越したコミュニ

ティ FM に押し上げてきたのである。

チーム麓というプロジェクトは、会社や NPO という法人の形態が主語なのではない。そうしたミッションを明確に掲げた麓氏をキーパーソンとした人のつながり（※奄美の言葉では「結い」）とその事業、つまりチーム麓事業が主語である。会社であるか NPO であるかは、戦術や手法の次元の問題にすぎない。チーム麓事業と言う場合の「事業」という語の意味内容は、ビジネスというよりもエンタープライズ（enterprise：大胆な企だてや冒険的な事業・企業）という訳語が似合っている。

もちろん、奄美の全てのメディアがこうした強いミッションを直接語っているわけではない。それぞれの立ち位置や手法のなかで島語りをしている。ただ、あまみエフエムのような強いミッションをもった島語りの文化装置が、先行する島の新聞や島のテレビとは別の流れから立ち上がってくるところに、今日の奄美のメディアの生成・発展のダイナミズムがある。

奄美群島初のラジオ局であるあまみエフエム最大の特色は、こうした強いミッションが放送番組・活動に明確に体現されていることだ。島口の多用やゲストの選択、番組担当者の配置、流す曲など、すべてにわたって局のミッションが明快に具体化されている。その実践は、奄美の文化ナショナリズムあるいは文化のパトリオティズム（愛国心・愛郷心）と言ってもよいような強いメッセージ性を帯びている。全国各地のコミュニティ FM をまわっても、あまみエフエムほど強いメッセージ性とキャンペーン性をもったコミュニティ FM に出会ったことがない。

この強いメッセージ性が〈島外からのまなざし〉であるマスメディアや研究者をも魅了する。あまみエフエムについての研究論考も幾つも書かれているが、300 を超える日本のコミュニティ FM の中で、これほどマスメディアや研究の対象になった局もないだろう。[1)]

写真：あまみエフエムの外観（撮影：加藤晴明、2015.3.18）
※あまみエフエムは、名瀬の繁華街「屋仁川通り」の真ん中にある。
1階が、群島初のライブハウス「ASIVI」である。

※　　※　　※

以下では、あまみエフエムに焦点を当て、そのリーダーである麓憲吾氏を中心に奄美のメディア実践をチーム麓事業として描いていく。ただ、最初に強調したように、一人の卓抜したリーダーは重要ではあるが、かといって一人の力でメディアが立ちあがるわけでない。また一つのメディアが〈地域のメディア〉を代表するわけではない。一人の偉業や、一つのメディアの素晴らしさを強調しすぎることは、メディアの社会史を過度に単純化してしまう。

本稿でも、少なくない分量をつかってチーム麓事業の物語を描いていく。それほどに奄美のラジオの物語は価値があるからだ。

しかしラジオだけを取り上げても、確かに奄美のラジオの成功の物語は麓氏に集約されない。3節では、奄美のラジオを支える奄美通信システムという通常の島ではありえない出色の企業とその経営者である椛山廣市氏（1950～）を紹介する。彼がいなければ、奄美のコミュニティFMの今の姿はない。麓氏と椛山氏がいなくとも、コミュニティFMは時代の流れとして、きっと島でも誰かが開局しただろう。しかし、それは都会のコン

サルタント会社がデザインした、高価なしかしどこにでもあるミニ県域局のような平板なラジオ局になっていただろう。麓氏という強いミッションをもったリーダーと、椛山氏の高い技術力との両輪が、つまりソフトとハードの両輪が、奄美に日本出色のラジオ局を誕生させたのである。椛山氏の力量で低コストで開局が可能であったからこそ、麓氏のアイデア豊かな個性が花開き、個性的で自由な事業デザインも可能となった。

沖縄本島も含めて南の島々にはコミュニティ FM が多い。筆者は、そのほぼ全てを繰りかえし訪ね歩いたが、地元で存在観をもっているラジオ局、共感をもって聴かれているラジオ局は多くはない。ラジオの島は、二人のリーダーの島への思いが結実した成果なのである。

また鹿児島県の職員として奄美にラジオが必要だということを政策として関わり、私的にも応援してきた方もいる。一人の成功物語の背景にある、そうした数々の人々の貢献や相乗的な関わりがあって地域のメディア事業が生成し発展する。〈地域のメディア学〉は、常にそうした多角的で螺旋的な胎動に留意していく必要がある。

本稿で〈地域メディアの総過程〉や〈表出の螺旋〉という表現を使っているのも、そうした表に出て称賛を浴びる〈文化媒介者〉に加えて、テレビや受賞という形で脚光を浴びるわけではないが、それぞれの立ち位置からの奄美語りの渦にも止目したいからである。椛山氏のような社会的貢献を意識している技術者・経営者、そしてチーム麓にかかわっている多様な協働者たち。そうした多種多様な人々のベクトルが集まり、メディアの生成と発展が厚みをもって展開していく。麓氏に代表される〈文化媒介者〉とは、そうしたベクトルを共有するような〈社会的想像力と実践の総体〉の代弁者として理解されるべきだろう。

奄美のコミュニティ FM はいま日本のコミュニティ FM の最先端モデルの一つである。以下ではその中核にいるあまみエフエムに焦点を当て、その個性や特性を抽出していく。

しかし 3 節以下では、できるだけ多様で多層な島のラジオメディアの生

成と発展も触れるようにしたつもりである。必ずしも十分に描ききれているとはいえないが、〈地域メディア総過程〉や〈表出の螺旋〉という表現は、島の中で、限られた資源を使い、身の丈に見合ったかたちで営むメディア実践の総体、社会的実践の総体の意味を込めて使っているつもりである。

●あまみエフエムに託されたミッション

奄美大島はもともとラジオ文化が希薄な島であった。山岳地形で電波状況が悪いためラジオが入らない地域も多く、ほとんどの島人にとって日常的にラジオを聴くという慣習が成立していたとはいえない。

少し前までは、島でラジオといえば、親子ラジオのことであった。親である送信所がNHKの放送を受信し、有線ケーブルを使って契約者の家庭のスピーカーに配信するラジオの共同聴取施設である。マイクによる自主放送も可能であることから、有線のラジオ放送局でもある。鹿児島から沖縄にかけてあったこうした簡易有線放送施設が親子ラジオである。（※奄美市名瀬地区にあった大洋無線については、別稿「奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編」で紹介した。）

そうした有線ラジオの文化しかなかった奄美大島に、2007年5月1日、初めての民間ラジオ局FMいるかが開局した。それが、あまみエフエムである。コミュニティFMという小規模なラジオ局の許認可の制度ができ、日本初のコミュニティFMが函館市に開局したのが1992年であるから、それから15年あまりを経ての出来事である。

地元の新聞は、「あまみエフエムが開局　島ンチュの、島ンチュによる、島ンチュのためのラジオ　初日は島唄、番組紹介、祝福コメント」の見出しのもとで開局日の様子を次のように伝えている。

「あまみエフエム」（愛称・ディ！ウェイヴ）を運営するのは特定非営利法人「ディ！」（麓憲吾理事長）。構想から五年を経て活動趣旨に賛同する支援会員・団体も六百人を超え、地域に密着した住民参加型ラジオの開局に漕ぎ着けた。…同法人は「奄美で暮らす人が、もっと奄美のことを知るための手段、奄美での生活を便利にするための情報源、奄美を島内外へ発信するメディアと位置付け、「住民参加型」の放送を展開する予定。麓代表は「人と人をつなげる道具になればいい」などと語った。（南海日日新聞、2007.5.2）

あまみエフエムの個性は、麓憲吾氏という卓抜したリーダーの思想や活動と重なり合う。麓氏は、コラム「日本の離島・我ンキャ（私たち）の中心」（2010）や、コラム内容を映像クリップ化したあまみエフエム紹介ビデオで、あまみエフエムの設立にいたる経緯や設立の理念について自ら語っている（※2009：京都の大学での特別ゲスト授業に際して作成したもの）。

ここ奄美では鹿児島本土からのメディアが聞こえてくるわけですが、鹿児島とは文化も言葉も異なりですね、中央メディアから流れてくる新しい情報に感化されて新しい情報が正しくて、島のもっている古いものが間違っているという、地方・離島のコンプレックスみたいなものがずっとあったんですけど…。ここ近年島唄とか奄美出身のアーティストがだんだん注目されるようになり地元もだんだんアイデンティティで湧き出てきまして、自分たちの誇りを感じれるようなツールがあればなと思って、そこで島の人が島のことを知るということから始めるというところで、奄美にもラジオ局があればなあと思って今から7年前、資金ゼロ、ノウハウゼロから、平成19年5月1日

に5年かけて開局することができました。（あまみエフエム紹介DVD）

麓氏は、われわれのインタビューでも、「島の人が島のことを知ることから始めるツールがあればな」がラジオが必要だと考える切っ掛けだったと述べている。氏が、島の音楽イベントを東京で開催した2002年のことである。自身の所有経営するライブハウスなどで音楽イベントをやりながら、店という閉じた空間ではなく、コミュニケーションがひろがる手段として考えたのがラジオであった（取材：2008.08.03、2014.01.26他）。

こうした語りからも、奄美アイデンティティを醸成していくためのメディア、そのために、「自分たちの文化に誇りを感じられるようなツール」「島の人が島のことを知るためのツール」としてラジオが選ばれていることがわかる。

将来の夢は、喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島、それぞれにコミュニティFMがたちあがっていって、奄美群島ネットワークがたちあがって、島々の島自慢だとか、僕たちの島はかっこいいよとかね、それぞれのアイデンティティが高まれば良いと思っています。島の暮らし、島がかっこいい、楽しい、と思えるような地元感化ができればなあと思っています。これから育つ子供達にも、島で生まれたこと、暮らしていることに、自信と誇りが生まれればなあと思っております。（あまみエフエム紹介DVDより）

麓氏はよく「島がかっこいい」というフレーズを使う。それは、島を出て行った人、島にコンプレックスを抱いている人への、都会での体験をふまえた麓氏のメッセージでもある。

もちろん、日本の多くのコミュニティ FM の中には、地域を元気にするためという目標を掲げて、地元の青年会議所や商工会議所、あるいは地元の企業家が集まって始めた局も少なくない。個人で始めた場合でも、「地域のために」を掲げている。だが、日本のコミュニティ FM のなかで、これほど明確に郷土愛（パトリオティズム）を打ち出し、自分達の文化を発信すること、自分たちの文化的アイデンティティの啓発を目指したラジオで、しかも地域のなかで大きな存在感と承認を得ているラジオ局は少ない。

コミュニティ FM にはそれぞれ個性があるが、あまみエフエムの個性を一言で表現するとすれば、「文化ムーブメントとしてのラジオ」、あるいは「ラジオを使った奄美アイデンティティの文化復興活動」である。あまみの文化ルネッサンス・ムーブメントでもある。[2)]

後に番組内容について述べるように、島口、島唄、島のことを知るための番組や、島の音楽など、地域の固有文化の発信にこれほどこだわっているラジオもない。

コミュニティ FM では、地元の地域名やイベントが繰りかえし発話されるが、あまみエフエムを聴いているとすぐに気がつくのは、「あまみ」という発話や奄美に関した内容が極めて多いことである。街頭スピーカー放送風の朝のゴミ出しの放送から始まって、ずっと奄美を感じさせる放送が続く。コミュニティ FM の多くも地域の地名やイベントを連呼するが、あまみエフエムの放送空間や音世界自体が、奄美らしい空間となっている。つまり、日々のラジオ局の活動や放送自体が強いメッセージをもった島語りとしてデザインされているからでもある。

ラジオは〈間接話法のメディア〉である。確かに魅力的なパーソナリティはいるが、多くの場合には、彼らが強いメッセージ性をもっているわけではなく、聞き上手やアレンジ上手であることが多い。またラジオは人と人、情報と情報をつなぐ〈結節点のメディア〉である。いろいろな人がラジオという放送空間、放送局の空間に集い、つながり、自分のメッセージを語

る。ラジオはそうしたメッセージを引き出す媒介者であるという意味で〈間接話法のメディア〉なのである。あまみエフエムの番組には、奄美のさまざまな論客や奄美研究者や音楽アーティスト、そして奄美に来島した多彩な人々が番組に出演している。まさに、奄美を語る人々の〈結節点〉であり、プラットフォームとなっているメディアである。

こうして個々のパーソナリティなどの語りは間接話法だが、番組全体、活動全体を通じてあまみエフエム自体が、郷土愛という強いメッセージ性をもった〈直接話法のメディア〉ともなっているところにあまみエフエムの個性がある。つまり、「このラジオが何をやろうとしているのか」が明確にリスナーに届く。その点が強烈な個性となっているのである。

日本の多くのコミュニティ FM は、「地域のため」「町を元気にする」という開局の理念はあるが、かといって放送局の日々の活動自体に強いメッセージ性自体をもたないことが多い。さしさわりのない NHK のような放送、あるいは政治的な事項、戦争、基地、そうしたことにあまりかかわらない。沖縄のコミュニティ FM でも、ある意味では、自治体の意向に沿い、生活の事項からはみ出さないように気を遣っている局も少なくない。沖縄最大の基地問題を抱える町のコミュニティ FM は、相反する立場の関係者が多いので政治・基地・戦争の話はタブーとまで言い切る。そうしたラジオ局がある中で、あまみエフエムの局自体のもつ、あまみの文化の醸成をめざすという強いメッセージ性は異色である。そのこだわりは、単なる郷土愛やローカリズムの発露というよりも、奄美への文化ナショナリズム（文化的なパトリオティズ）・ムーブメントのそれである。

あまみエフエムのメッセージ性と放送空間の奄美らしさ、それは、インターネットでラジオを聴く奄美出身者にとっても、あるいは奄美好きな島外の人々、つまり〈奄美コンテクスト〉をもつ人々にとっても大きな魅力要素となっている。その明快さが、あまみエフエムに関心をもつマスメディアや訪問する研究者を惹きつけてやまないのだろう。

写真：あまみエフエムのスタジオ（撮影：加藤晴明、2014.6.29）
※島口が達者なパーソナリティの渡陽子さんは大人気だ。

●開局にいたる経緯

あまみエフエムの開局については、麓氏自身の語りや論考（麓憲吾、2003,2010,2014）や豊山宗洋論考（2012）によって丁寧に紹介されている。そうした論考も参考にしながら、改めてその経緯をまとめてみよう。

あまみエフエムのスタジオ・事務所の下の階には、麓氏が立ち上げた奄美群島初のライブハウスであるROADHOUSE ASIVIがある。それを運営したり、音楽イベントの企画・音楽コンテンツの制作などを担う会社が麓氏の有限会社アーマイナープロジェクトである。この飲食業・イベント・音楽コンテンツの企画制作会社は、コミュニティFMが開局する10年前の1998年秋にスタートしている（法人登録は、2002年）。ライブハウスとコミュニティFMは、麓氏の島おこしプロジェクトの両輪でもある。スタッフは変動もあるが、徐々に増えて両方を合わせて20人以上になる。

○〈麓憲吾氏と NPO 法人ディ！・あまみエフエムの主な活躍〉
1989 年：麓氏東京に上る（東京でも音楽活動）
1994 年：麓氏島に帰る（帰島後も音楽活動）
1998 年：ライブハウス「ASIVI」開業
以下、NPO ディ！の活躍
2004.11.08：島おこしのための NPO 法人ディ発足
2007.05.01：コミュニティ FM　あまみエフエム開局
2008.04.13：全労済文化フェスティバル「夜ネヤ、島ンチュ、リスペクチュ！！」開催（新宿）
2009.05.01：奄美市と防災協定締結
2009.07.18−19：奄美皆既日食記念実行委員会オフィシャルイベント「夜ネヤ、島ンチュ、リスペクチュ！！」（奄美パーク）開催
2010.01.04：エフエムうけん開局、提携放送を開始
2010.05.01：中継局 2 局（住用、笠利）増設
2010.05.16：全労済文化フェスティバル「夜ネヤ、島ンチュ、リスペクチュ！！」（新宿）開催
2010.10.20：奄美豪雨災害の発生に伴い、20 日から 24 日まで災害情報を放送
2011.05.01：サイマル放送開始
2013.10.20：復帰 60 周年イベント「夜ネヤ、島ンチュ、リスペクチュ！！」（奄美パーク）開催
2016.11.01：第 40 回南海文化賞を受賞（南海日日新聞が優れた功績を残した人・団体に出す賞）
（※こうした経緯をみると、開局後 2〜3 年後の、2009 年から 2010 年が飛躍の年であったことがわかる。）

ライブハウス ASIVI については、奄美の音楽産業の論考で再度取り上げることになるが、本稿との関係で焦点になるのは、なぜ、麓氏がライブ

ハウスの経営からラジオへ展開したのかというメディア事業の発展の経緯である。氏は2002年くらいから、“島にラジオがあればな”、“自分たちのメディア、奄美としてのメディアがあればな”と思い始めたという。

元ちとせの「わだつみの木」がヒットし、奄美や島唄が少しブームになっていた時期、麓氏は雑誌のインタビューに答えて、外からの一時的なブームではない、地に足の着いた奄美の内発的な盛り上がりの必要性とラジオの可能性について語っている。

> だから今、外側だけがブームになっている状態から、本当に奄美大島が自力的にブームになるには、全然時間がかかるんです。まだまだこれからなんだと思います。…僕、今、ラジオを作りたいんですよ。奄美にはないんです。鹿児島のラジオはあるんですけど、リアリティが全然ない。……ラジオを作ったら島の中にちゃんとブームができて、面白くなるんじゃないかって思うんです。そしたら自分達の文化が自分達でかっこいいって感じれるようになるから、絶対。（麓憲吾、2003、140頁）

筆者らの取材にも、あまみエフエムの経緯について麓氏は次のように語る。

> 下のお店でイベントをやっていたんですけど、（営業的な魅力とは別に）このお店というのは凄く閉鎖的なんだな。ここでイベントを重ねることが島を変えることではないな。もっと発信しないと、伝えないと、という思いが強くなって…。島にもいろんな市民活動団体があるんですけど、みんなお店のように籠もっていて…、もっとコミュニケーションをとったり、活動の意味を伝えることで…。みんなに伝え

ることで、凄く変わっていくのにな。島の人が島のことを知ることから始めるツールとしてラジオがあればなと思ったんですよ。（取材：2008.03.05）

興味深いのは、島の文化への覚醒が、〈島外からのまなざし〉との接合のなかで生まれていることである。アマミノクロウサギの撮影をライフワークとしてきた写真家の浜田太氏もそうだし、多くの島唄の唄者もそうだが、島外での経験や〈島外からのまなざし〉を経て、奄美を知らなかった自身への問いかけがあり、それを起点にして〈島内のまなざし〉が深まっていき、それぞれの実践の成果に結びついている。

この島へのまなざしのＵターン的な回路について、豊山宗洋は「本土のフィルターを通して奄美をみる」という行動様式として総括している（豊山宗洋、2012、24 頁）。確かに、麓氏はいろいろな機会に本土のアーティストとの交流のなかから島唄の価値を示唆されそれに気づかされたことを語っている。豊山は、そこから彼が「奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する」方向に発展させていく行動様式は、島唄という特定の部分にのみ価値を見出す島外者とは大きく異なっていることを強調する。

しかしこのとき島唄への視線は、本土のアーティストにとって価値ある側面に限られており、それは、「奄美の歴史と伝統文化そのものを基盤に自己を認識する」行動様式と同一視するわけにはいかない。筆者が麓の活動に注目するのは、彼が本土の人から島唄の価値への気づきを得たのち、島唄だけでなく島の生活、文化へと視野を広め、「島人に島人としての誇りを醸成する」ためには、「島の人が島のことを知るべきだ」という発想のもと具体的な活動を開始したからなのであ

る。（豊山宗洋、2012、26 頁）

豊山も指摘するように、麓氏のミッションは、「島人に島人としての誇りを醸成する」ということである。麓氏は、自ら書いたコラムでも次のようにコミュニティ FM 設立の目的を語っているが、その中でラジオが好きだからとか、理想の NPO 放送局が必要だからということではなく、より大きな目的のためのツールだったことを強調している。

私たちはコミュニティ FM を作ることが目的ではなかった。伝えたい物事があり、そのためのツールがコミュニティ FM である。伝えるべき物事がある限り、そのツールを維持していく覚悟である。先人たちが残してくれたシマ唄・島口などの文化・歴史・自然を受け継ぎ、また子ども子孫へ誇りをもって語り継ぐものとして…。中央メディアや鹿児島ローカルメディア、そして私たちあまみエフエムを通して、島の人々が己を知り、違いを知り、それを誇りに思えること、感じることのできるアイデンティティの形成に努めたいと思う。島内外にいる奄美大島出身者にとって、この日本の離島「奄美大島」は私たちのアイデンティティ、そして中心である。（麓憲吾、2010、126 頁）

朝日新聞の土曜特集記事である「フロントランナー」も、2012 年 8 月 18 日版であまみエフエムを特集し，麓氏の次のような言葉で記事を結んでいる。

災害にラジオがあったほうがいいでしょう。でも、局を立ち上げることが目的になってほしくない。日ごろからラジオで伝えたいことが

あるかどうか。都会や県域の放送局のやり方ではなく、前面に押し出した郷土愛を、地域の人がどれだけ受け止める度量があるかによると思います。（朝日新聞：2015.8.18）

ラジオを立ち上げるに際して、みんながとっつきやすい方法としてNPOという手法があることを知ったという。京都で日本初のNPOラジオ局・京都三条ラジオカフェが開局し、そこで活躍した大山一行が鹿児島県の大隅半島で、NPO法人おおすみ半島コミュニティFMネットワークを立ち上げ、コミュニティFMを開局した（2006～）。その大山らとの交流によって、申請書類など様々な手法を学ぶことができたという。

しかし重要なことは、麓氏たちが、書類や技術的なことは他のコミュニティFMを参考にしつつも、そうした局と自分達の目指す局との違いを明確に認識していたことである。それらは「僕たちのモデルではない」、「自分達のオリジナルでいいや」という選択は、コミュニティFMにとって実は極めて重要な立ち位置の選択であった。（※それぞれの固有な条件や独自のモデルの模索が大切だという認識は、コミュニティFMという構造的な困難な事業において、魅力ある放送局をつくりあげるための必須要件でもあるからだ。）

こうした経緯からも、島のことを島の人達が知るための手段、島のことを伝える手段、島の人達のコミュニケーションの手段、一般的な言い方をすれば島おこしのための手段として位置づけられている。そして、そうした島のためという社会的承認を担保するために選ばれたのが、個人会社や株式会社ではなくNPO法人という手法であった。NPOという選択について豊山は、次のように説明している。

一方、「復帰50周年夜ネヤ」のあと、麓に対して、一部で、イベン

> ト開催は彼の売名行為にすぎないという批判が生じた。主催こそ奄美群島青年団連絡協議会であったが、企画制作および事務局は麓のアーマイナープロジェクトだったからだった。それゆえ麓は、コミュニティFMを運営するには従来の方式ではだめで、他の人から理解と協力を得られる体制を整える必要があると考えた。（豊山宗洋、2012、30頁）

この経緯は重要である。麓氏のミッションをもっとも有効に実現するために選ばれた手法がたまたまNPOだったのであり、そうすることで、島のためになるという公共財的なイメージをもってもらい、ラジオに理解と協力を得ることができると考えられたのである。そうして立ち上げられたNPO法人ディ！は、放送事業のためのNPOであり、島おこしの全てを託されたNPOである。

設立理念は以下の3点を謳っている。

> ・奄美大島とシマッチュが持っている地理的・文化的な素材／素質の価値をシマッチュ自身で再認識してもらうこと
> ・人と人とのつながり「結い」を大切にし、さらなるシマの価値を創造すること
> ・子供たち、孫たちの世代へ向けてシマの素晴らしさを伝えること

NPO法人ディ！は、コミュニティFM開局に先立つ3年前に法人立ち上げを行い、開局の1年前の2006年4月に事務局を立ち上げスタッフの雇用を開始している。最初は現在の半分の5名ほどの体制からスタートし、それを本業のライブハウスのスタッフが支えたりしながら、徐々に事業・スタッフを拡張している。スタッフは、地元出身者だけではなく、Iターン者も少なくない。麓氏が肩をたたいて発掘してきた現在総括部長を

務める丸太泰史（1974～）氏らの精鋭たちである。NPO の会員は、開局時 2007 年 5 月段階の会員数は 636 名、開局 1 周年時が 978 名、そして 2 周年で 1,178 名と 1000 名を超えた。2016 年 12 月末段階で 1698（企業団体 433、個人 1265）名である。

麓氏は、開局時にはすでにライブハウス事業や音楽イベントを通じて鹿児島の放送局で紹介されるなど、島内ではある程度知られる存在になっていたが、コミュニティ FM を通じてさらに社会的認知度が高まった。ライブハウスといういわば「水もの」の事業から、総務省の許認可事業である放送事業者への発展は、氏の社会的位置を向上させ、今や奄美群島を代表する若手リーダーへと押し上げたと言っても過言ではない。

●美意識の原点としての「結」

既に述べたように、麓氏にとって NPO は、奄美を活性化するための手段であり、決して「NPO 主義者」ということではない。NPO の方が「島っぽい」と考えたという麓氏のセンスは、島の「結」の文化などから来ているのであり、その方が、島の人々がとっつきやすいと考えたからである。

> 奄美大島は、…少しばかりの狭い平地にシマ（集落）というコミュニティが…点在する。お互いが存在を把握認め合うことで治安や秩序が保たれ、相互扶助など共同体意識が強い、そのため NPO 精神が無意識の中に宿っている。（麓憲吾、2010、215 頁）

こうした発言からは、麓氏の立ち位置にあるものが、ある種の共同体主義やロマン主義につらなる美意識であることが見えてくる。こうした美意識は、麓氏の青年団活動への評価からも読み取ることができる。[3)]

「夜ネヤ～」には、各集落の青年団の八月踊りや余興などのステージ披露も設けています。青年団は各集落で清掃作業、豊年祭、敬老会など、多くの地域行事・作業に関わり大切な役割を担っています。もちろん彼らのほとんどが一度島を出た経験をもち、そのおのおのが島に戻り、生まれ育った集落に暮らし、煩わしい人間関係や集落作業もありながら役割を担っています。そのような各青年団が奄美市名瀬生まれでそのような関わりのない街っ子の私は、とても逞しく思えました。…ある意味、その集落・コミュニティでの役割がアイデンティティを形成する一つの要素といえます。しかしながらその青年団のような価値観・活動を対外的に伝える術が少なく、…（麓憲吾、2014、59 頁）

2014 年のこの語りは、すでに 2007 年の開局直後の研究者のインタビューでも語られていて一貫している。

青年団とかかわる機会があるんですけれども、小さい社会の中で、子供とかお年寄りとかがいる中で、そこと逃げずに向き合って、敬老会のことや集落活動をやりながら、面白さを作ってるっていうのは本当にたくましく感じて。僕なんか奄美の中でも町の生まれなんで、そういう青年団なんかと関わって、すごく価値観なんかが変わってきていてですね。田舎なりの潔さとかを目指していけば、オリジナルのスタイルみたいなのが、ローカルが本当にグローバルになっていく可能性っていうのがある。島のスタイルを作っていくにもそうした価値観でものづくりをしていきたいなあというのはすごくありますね。（金山智子、2008、13 頁）

この二つの語りには、奄美の都会っ子である麓氏の美意識がよく現れていてあまみエフエムの原点を示す貴重な証言でもある。奄美の集落（シマ）

には余興文化が息づく。それは生活のなかで楽しさを自作自演する文化でもある。確かに、単純な農村共同体への憧憬は社会思想史的には共同体主義やロマン主義に属し、時にそれは国家統治を強化するイデオロギーとしても機能してきた。しかし、麓氏は集落（シマ）の生活に美しさだけを見ているわけではない。その煩わしさや大変さをわかったうえで、集落（シマ）という地にあって、その歴史に誇りをもち、そこに留まって、楽しさを自作自演していく生き方に「かっこよさ」＝美的価値を置いているのである。

奄美人のアイデンティティや生活文化の原郷は集落（シマ）にある。あまみエフエムの番組でいえば、集落（シマ）の自慢話を過去に遡って聞き出す取材番組の「ナキャワキャ島じまん」はそうした美意識が強く反映した番組である。

その原郷も今日大きく変容しつつあり、人口減少が著しい。しかし、青年団活動に象徴されるように、生活の地である島の集落（シマ）に踏みとどまることこそが奄美の再生につながる。麓氏が最も重視しているのは、そうした住み続けることへのこだわりのようにも見える。奄美という“地に在る”ことへのこだわりは、あえて名づければ「在地主義」とでも言ってよいのかもしれない。「島に帰って来て欲しい」、「島の共同の暮らしのなかで、奄美をなんとかしようよ」、そうした地域の共同のあり方へのこだわりと通底するものとして選ばれたのが、NPO という仕組みだったように思われる。そういう意味では、麓氏の NPO 法人は、美意識的には「結」法人である。

表 1：奄美の外と中をめぐる〈まなざし〉の二重構造

まなざしⅠ（島外からのフィルター）		
島外（東京）からのまなざし	⇒	（自然・文化・歴史の島）奄美
まなざしⅡ（名瀬のフィルター）		
島内都会（名瀬）のまなざし	⇒	青年団に象徴されるシマの社会·文化

東京での体験を経由して、島にもどり、島の生活や文化の価値を発見し、それを伝播していく〈文化媒介者〉となる過程は、まなざしⅠを契機にしながらまなざしのⅡへと転生していく生成と発展のプロセスでもある。

まなざしのⅠは、豊山が指摘したように、島唄といった都会の人の特定のフィルターから浮かび上がる奄美である。まなざしⅡは、その奄美の全てを引き受けて、名瀬という都会にあって、改めて奄美人であることの原郷を求めたときに浮かび上がる集落（シマ）であり、「結」の文化である。奄美という地に在ることが島にとって最も重要なことであり、その美意識・価値観の準拠点が集落（シマ）の「結」の文化となる。

こうした島外経験や島外の人々との出会いを媒介にして、島人・島文化の足下を考えるようになり、そこから島文化の基層である集落（シマ）という原郷に向かう。このまなざしⅠからⅡへと転換していく二段階の回路は、麓氏だけではなく、島唄の唄者や奄美出身や一世・二世などの島語り人にしばしば共通する回路でもある。

まなざしⅠとⅡの違いは、旅ンチュのそれと島ンチュの違いでもあるだろう。このような在地主義ともいえる思考からすれば、たぶん観光客のような旅ンチュや、島応援団の内地ッチュがいくら増えても、そのままでは島の文化を醸成していくムーブメントや島を発展させていく力にはならないということになるのかもしれない。

「結」の文化と共振するようなラジオ、それは、個人事業と思われがちなメディア事業にソーシャルな支援をもたらす源ともなる。NPO の法人会員の一人は、会員になっている理由を、「あれは公共財…だから」、地元で事業している者として会員としてお付き合いすると述べている。つまりあまみエフエムは、NPO 法人にしたことで、島の「結」の文化と連続する意味での「公共財」的な位置を獲得することに成功してきた。コミュニティ FM は、地域の人々に支えられて初めて持続的経営が可能なソーシャルな事業である（加藤晴明、2007）。この会員の発話を聞くとき、あまみエフエムが地域のなかでそうしたソーシャルな支持を広く獲得してきてい

ることがわかる。もちろん、そうした支持は会社という形式でも可能であるが、NPO 法人という選択がより一層それを可能にしたことは確かである。

●麓氏の卓抜したリーダーシップ

ただ、コミュニティ FM は、ソーシャルな事業ではあるが、法人の形態にかかわらず中心的な担い手の個人的属性を強く反映し、その資質に依存して事業が営まれる。出版にしろ、テレビにしろ、ラジオにしろ、小さなメディア事業とはそうした性格を帯びている。そもそもコミュニティ FM は、そうした属人性を備えることで個々の地域特性に対応したそれぞれの運営のあり方を開発してきている。

小規模独立メディアであるコミュニティ FM は、運営ノウハウが標準化されているケーブルテレビなどとは異なり、ある意味ではメディア事業の雛形が存在しない。会社形態であれ NPO 形態であれ、中心になる担い手の個性・アイデア・人柄といった属人的要素に左右されるメディアであり、そうでない限り運営はうまくいかないやっかいなメディアでもある。

そうした視点からみれば、あまみエフエムは、麓氏の個人企業ではないが、今日までのところ基本的にはチーム麓事業（enterprise）であり、麓氏の資質の上に成立している事業である。資金調達の形も、コミュニティ FM によくみられる 20～数十社の地域企業を網羅したかたちでの出資による資金調達ではなく、麓氏と技術的な基盤を支えた奄美通信システムの社主が開局資金を準備した有限会社的な側面をもっている。麓氏の本業としてのライブハウス、そして通信工事会社というサポート会社がちゃんとあったことも、あまみエフエムの立ち上げの成功の要素として忘れてはならない。後に述べるが、コミュニティ FM にとって、サポート事業者がいるかいないかは、事業の実質的な成否に関わる極めて重要な持続要件なのである。

こうした開局の経緯からも、あまみエフエムはチーム麓事業という独特

の法人といってもよいのかもしれない。当然のことながら、あまみエフエムはチーム麓事業として、麓氏の個性が強く反映したひとつの〈自己メディア〉でもある。（※〈自己メディア〉とは、人はさまざまなメディアに託して自己に輪郭を与えていくという意味で筆者が提起した造語である。加藤晴明、2012）

繰り返すが、小規模独立メディアにおいて、こうした強いリーダーシップが重要なことはその事業形態が会社であろうと NPO であろうと変わらない。全国のコミュニティ FM を担う、強烈な個性の事業者たち同様に、麓氏もまたその強い個性と卓抜した指導力を発揮しているプロジェクトリーダーなのである。[4)]

2節　あまみエフエムの個性

●幾つもの個性が融合したラジオ局

現在日本には、300 以上のコミュニティ FM がある。基本は 20 ワット（例外的に 50 ワットもある。県域放送の MBC ラジオは 50 キロワット）という出力の制約のなかで、それぞれの地域に根ざして活躍している放送局も多い。他方で、なんとなく開局し、なんとなくラジオ番組を流しているに過ぎない、地域からの支持をあまり得られない、盛り上がらない局もある。そうした多様なコミュニティ FM 局があるなかで、あまみエフエムは、出色の存在として注目されていることは既に指摘した。

あまみエフエムの放送の魅力要素を整理すると、以下のような個性が浮かび上がる。

1．島口・島文化発信ラジオ
2．〈奄美うた〉の文化発信ラジオ：充実した音楽アーティスト番組
3．イベント発信ラジオ

こうした個性にあえて付け加えるとすれば、「島外とのつながり」があ

げられる。とりわけ、島外メディアとのつながりは大きい。麓氏は、ライブハウス以来、数々の取材を受けてきている。そこから取材する側とのつながりが生まれてくる。またライブハウスは、地元の音楽ミュージシャンの結節点でもある。それは、東京のメジャー音楽産業とのつながりを生む。また、研究者のあまみエフエム詣も、島外とのつながりである。

チーム麓事業は、奄美という自然・文化・人の魅力を抱えた島を、劣等感から解放し、「おもしろく」「かっこよく」表現してきた。その実践を通じて、島のよさに気づき自分の島に誇りをもってもらう、ラジオはそうした「気づきの装置」（麓憲吾、2014、60 頁）だという。島の文化を改めてラジオを通して〈メディア媒介的展開〉をすることで、新たな島のアイデンティティを醸成・再生していく。そうした明確な事業のミッションや戦略・戦術が、強いメッセージ性を生み、島内だけではなく、島外のメディアや研究者とのつながりを拡大してきたのである。

●個性 1：島口・島文化発信ラジオ

あまみエフエムの放送の中では、島、奄美という言葉の発話が非常に多い。どのコミュニティ FM も自分たちのエリア内の地名を繰りかえし発話するが、あまみエフエムほど、地名・島文化など自己を指し示する語彙を発話するラジオもないだろう。麓氏の立ち上げたライブハウスの ASIVI 自体が、あしび（遊び）という島口であり、NPO 法人のディもまた、「さあ」「レッツ」という意味の島口である。ディ・ウェイブを初めとして、島口とカタカナや英語を組み合わせた言葉あそびのセンスは、麓氏がめざす「島がかっこいい」ということの実践的な表現でもあろう。島口や島の文化重視のラジオ放送は、まさに「島人に島人としての誇りを醸成する」という麓氏のミッションそのものを反映している。

島口を使ったラジオということでは、沖縄のエフエムたまん（糸満市）が放送の 3 分の 1 程度を島口（沖縄語）で流していることでよく知られている。あまみエフエムの場合には、たんに島口（奄美語）が頻繁に登場す

るというだけではなく、島口が奄美の大切な文化資源であることを明確に主張していることである。この明快な文化ムーブメントという側面が、あまみエフエムが高く評価される要因にもなっている。

あまみエフエムでは、番組プログラムの名称に島口がふんだんに使われている。すでに改組された番組も含めて、少し列挙しておこう。朝の生ワイド番組が「スカンマーワイド！」で、スカンマーは、朝という意味であるから、モーニングワイドという意味になる。昼の生ワイド番組の「ヒマバン・ミショシーナ！」は、お昼ご飯食べましたか。夕方の生ワイド番組「ゆぶぃニングアワー」は、イブニングと奄美語のゆぶぃ（夕方）を掛け合わせた語呂合わせ言葉である。「ナキャワキャ島自慢」は、あなた方と私たちの島自慢。「きゅーぬゆしぐとぅ」は、今日の教え・格言。「読みむんマンディー」は、たくさんの読みもの、読み物がいっぱい。「キューヤヌーディ」は、今日は何の日の意味で、朝のコーナーとしてあったが、現在は「この日何の日気になる日」という名称になっている。「ヌーディ・カーディ」は、なんでもかんでも。「なちかしゃ、みくいば」は、懐かしい美しい声。「イモリーナ・イモリーナ」は、いらっしゃい、いらっしゃい。「あっただんまドゥシ！」は、すぐにお友達となるの意味である。

奄美の文化にこだわった番組プログラム例を作表してみたのが表２である。直接に奄美文化に関係ない場合でも島口へのこだわりをみせる。例えば「オタクラジオ」などのサブカル番組の場合にも、アニメの台詞を島口バージョンで表現したりして奄美らしさにこだわっている。(※もちろん、どのコミュニティ FM にも、それぞれの地域に焦点を合わせたすばらしい番組がたくさんある。そうしたことを前提にしつつ、表２では奄美の文化・歴史を意図的に前面に出した番組プログラムを過去番組も含めて列挙した。)

表２：あまみエフエムの島口・島文化・島の歴史に関わる番組

番組名	放送時間	内容
区長さんのゴミ出し情報	朝６：30~	街頭放送風のノスタルジックな声による放送
きゅうぬゆしぐとぅ	朝６：00 代のコーナー	今日の島の格言を説明する。
英会話のＯＶＡ（過去番組）	朝・夕の生ワイドの中のコーナー	標準語と島口と英会話を組み合わせた人気番組であった。オバとジジネタに移行
オバとジジネタ	朝・夕の生ワイドの中のコーナー	時事ネタを島口で語る番組
読みむんまんでぃ	朝の生ワイド番組の中のコーナー	島を舞台にした文芸作品の朗読
奄美群島みんなのニュース	朝の生ワイド番組の中のコーナー	50 年前の奄美の出来事を新聞から拾って読む番組
ナキャワキャ島自慢	朝の生ワイド番組の中のコーナー	島の各集落に取材して区長や年配者にかつての集落の歴史や自慢を取材する番組
月曜文学散歩	月曜日 21：00~30 分	奄美にゆかりの文芸作品の朗読
放送ディ！学	水曜日 13：00~60 分（再放送２回）	奄美の民俗文化や自然などを専門家に学ぶ学校形式の番組
あの日・あの頃	土曜日昼	軍政下の奄美を語る番組
シマグチ NEWS 島ゆむ TIME	日曜日７：30~30 分（再放送２回）	数人で最近のニュースを島口で表現する
語り継ぐこと	８月の特別番組	奄美での戦争経験について語る番組

※あまみエフエム番組表より作成（2016.11.15）

あまみエフエムの島口重視の放送について、一つ指摘しておかねばらないことは、その島口が、名瀬の放送スタジオから送り出される〈メディア媒介的展開〉による島口だということである。地元でしばしば語られるように、島口を聞いて出身集落が分かるくらいにシマジマ（集落ごと）の違いがあり、敬語もあるという。さらにいえば、奄美のような家系がかなり

明確な社会では出身階層による言葉の差異も想定される。そうした島口自体の差は、島内でもしばしばあまみエフエムで使われる島口への批評という形で耳にする。そのことは当然のことながら、あまみエフエムも自覚し、むしろそうした相対化される対象となることが、逆に島内のそれぞれの自分の集落（シマ）の独自の文化への気づきにつながっていると前向きに捉えている。

> …島の自然・文化・歴史のことが島口で語られ始めました。私たち島ッチュ自身が関わっている島のおもしろさ、かっこよさなどが伝えられ、それがラジオ局の目的であった共感や拡がりが生まれ始めます。一方、違和感も生まれました。「私の地域ではそのような島口は使いません！」とお電話を頂きます。これまでのメディアからは気づくことのなかった感覚です。おのおの地域の言葉や在り方の「違い」を放送により計り知ることができています。（麓憲吾、2014、61 頁）

そもそも奄美大島の中心市街地である名瀬の島口は、トン普通語といわれ、一種の名瀬で標準語化された島口である。この構図は、沖縄那覇の島口も同様であり、ウチナーヤマトグチや琉球クレオール（※宗主国生まれに対して、植民地生まれの言語・文化・人に使われる語彙）といわれる。ヤマトグチ（日本語風）というよりも、名瀬という大島郡の郡都に標準化された島口ということであろう。現在あまみエフエムで中心的に島口を発話している人気女性パーソナリティの渡陽子氏は宇検村の集落出身である。もうひとりの女性は、喜界島出身である。男性パーソナリティでもある放送局長の丸太泰史氏は名瀬出身。つまり、あまみエフエムという局内の島口文化も合成化せざるをえない。今日の奄美文化は、島唄・言葉に加えて料理や紬などのクラフトも、〈メディア媒介的展開〉をすることで継承・創生されている。その意味では、あまみエフエムが継承し創生してい

る島口は、“あまみエフエム島口”として理解すれば済むことなのである。

写真：あまみエフエムのサテライトスタジオ（撮影：加藤晴明、2012.9.11）
※古い市場にできた駄菓子屋風のオープンなスタジオ
このスタジオが出来てから、市場はテナントが埋まり人気スポットに変わった。

文化は常に、正統性（オーセンティシティ）をめぐる葛藤を生み出す。島唄は、基本は個人唄であるから、その変容に関する批判は少ないが、それでも本物の島唄や唄の崩れ方をめぐる批評談義は絶えない。八月踊りもしかりである。奄美高校八月踊りがあり、古仁屋の若林教室の八月踊りがある。奄美の文化をめぐって、「あれは違う」という声はいたるところで聞く。しかし、文化とはそもそも外との交流のなかから移植され、創生されるものである。今日、集落（シマ）という生活の基盤が変容したなかで、習い事文化・教室文化として継承されるさまざまな奄美の文化は、〈メディア媒介的展開〉を遂げつつあるものとして理解される必要がある。

島口や島の文化、そしてメディアの役割についての背景を理解するために、奄美の島口の歴史について少し補足しておこう。

●補足：奄美の標準語教育と方言禁止について

沖縄や奄美では、戦前だけではなく、戦後も1975年くらいまで学校教育の場で方言の使用が禁止されて、厳しい標準語教育が行われた。そうした奄美群島の方言禁止については、西村浩子の詳細な研究がある。西村は、1994年から1998年まで奄美群島の各地の30歳以上の男女を対象にインタビューを行い、以下のような結果をまとめている（西村浩子、2001）。

①方言禁止の時代：大正年間（1912～）から昭和50年頃（～1975）まで

②方言禁止の場所：主に小学校。厳しい地域では学校外でも。学校では「方言をつかわないようにしよう」等の月または週の目標があった。

③方言使用者への罰：主に方言札を首に掛けたり、体罰・罰当番等があった。

④方言札について：方言札は、B5大くらいのものから10センチ×3センチくらいの小さなものまであり、戦前は木製、戦後は紙製が多く、書かれている文字は「私は方言を使いました」が多かった。首に掛けるほか、後に下げたりピンで胸や背中に留めた例もある。

⑤当時の意識：教師の指導は正しいと思われ、学校内での方言禁止は当然のことと受け止められていた。友人に渡す行為は、わざと方言を使わせることも含めて、一種の遊び感覚もあった。

方言禁止の背景について、西村は方言禁止と標準語教育を、マイノリティ文化への抑圧批判という単純な文脈ではなく、それぞれの時期の社会的状況と照らし合わせながら説明している。大正期は、出稼ぎの増加と都会での言葉の問題から方言を使わないように指導された（関東大震災の時には、「日本語」が話せないと外国人に間違われて迫害を受けたことなどから）。戦時体制下では、「国家的統一の教育、戦時体制の強化」が図られ、言葉の教育が大事と考えられた。「方言を使うは国の仇」という歌を朝会で歌わされたという。戦後の昭和期は、本土復帰後、集団就職の出稼ぎ人口の増加に伴って都会で生活するために言葉＝標準語が重視された。

> これまでの調査の範囲で、小学校の方言禁止の背景として考えられることは、戦前・戦後を通して当時の社会の動きの中で生きた、島の人々の「感情」である。特にそれは、教員の、学力の向上を願い、本土に送り出す子供たちが就職先で困らないようにと願う、子供に対する思いと、復帰に対する熱意であった。（西村浩子、2012、177 頁）

また西村は、「子供たちは生活用語と学習用語が異なる二重言語生活をしており、授業中の発表もままならなかった。共通語の語彙を増やすことが学力の向上につながると考えていた。（喜界島、1927 生、女性）」という興味深いインタビューも紹介している。「民族の心の歴史であり、激しいビジネスの世界での生活の武器でもある標準語」を身につけることが島の国語教育の最優先の課題であり、復帰後は本土の教育水準に追いつきたいという教育関係者の強い思いがあったのだという。

こうした標準語教育に加えて、様々な理由で奄美でも標準語で暮らす家庭が増え、失われゆく言葉への危機感が強まる。西村が背景として指摘するのは、①島へのマスメディアの浸透による共通語の浸透（NHK ラジオ放送の名瀬中継局の開局が 1951 年、テレビ放送が 1963 年）。②標準語教育世代が家庭で島口を使わない・使えない。③異なる島口の集落間の結婚の増大（社会移動・人的交流）である。

西村は、こうした社会変容を背景にして、島口への危機感が生まれたのが、1975 年頃だと推定している。南海日日新聞の「シマゆむた大会」は 1975 年に第 1 回大会が開催された。ちなみに、奄美新人民謡大会（新人大会）も 1975 年に開催され築地俊造が優勝している。その大会は、1980 年には奄美民謡大賞（第 1 回大会）へと発展し第 1 回優勝者が坪山豊である。築地俊造が民放のテレビ番組で民謡日本一になるのが 1979 年、古仁屋で朝花会が発足するのが 1979 年、笠利でわらぶぇ島唄クラブが発足するのが 1983 年である。また、和眞一郎ら奄美出身の知識人たちのサロンである

「奄美を語る会」が鹿児島で発足したのが1981年である。まだ奄美関係者に限られていたのかもしれないが、島唄・島口・島の文化への関心の高まりや盛りあがりも、この1970年代から1980年代にかけてである。

こうした地域・地方文化への覚醒は、奄美の島口・島唄に言えることだけではなく、20世紀第3四半期において全国的に提起された思潮運動でもある。その流れは、21世紀になってさらに強化された。奄美でも、当然のことながら、島唄、島料理、島言葉への再評価の機運が台頭する。

奄美の方言の継承という問題は、本稿の守備範域ではないが、日常使うことがなくなった方言にとって、それを意識的に使うことに価値やメリットを見出しにくい状況にはなっている。奄美のメディア関係者のなかにも、生活から離脱している以上、いずれはなくなると割り切る人もいる。西村は、「方言を使えることへの新しい価値付け」、方言への付加価値の創造やアイデンティティの創造・確認、地域・学校・行政の連携などのほか、マスメディアの有効利用を指摘している。「標準語」の浸透にマスメディアが拍車をかけたように、方言をマスメディアに乗せて普及を図る方策があるとし、島に放送局がないことが沖縄との違いだと指摘する。西村の論考の時期（2001年）にはすでに島にはケーブルテレビがあるので、西村が1992年に制度化されたコミュニティFMを知っていたか否かはわからないが、言葉をより生々しく放送できるローカルなラジオを想定したことは想像に難くない。

島にマスメディアがあること、マスメディアに乗せて島口を普及させること、島口に付加価値を付け、島のアイデンティティを醸成すること。それこそが、あまみエフエムを通じて麓氏が実現しようとしてきたものでもある。西村のこの論考が2001年、麓氏が「島にラジオがあればなあ」と思い始めたのが2002年頃である。研究世界と実務世界と両者の世界は異なっていても、奄美におけるラジオ開局は社会状況を反映した奄美の欲望だったのかもしれない。実際、麓氏以外にも、島内でラジオ開局の検討は行われていた。奄美におけるラジオ局の開設は、チーム麓事業（エンター

プライズ）に仮託された“奄美の文化とメディアをめぐる島の社会的想像力”の帰結だったとさえいえるかもしれない。

●個性２：〈奄美うた〉の文化発信ラジオ

あまみエフエムは、島口や島のコミュニティ再生、島のアイデンティティ再生のラジオとして知られているが、もう一つの顔がある。それは島発の音楽にこだわり続けている点である。放送で流す曲も、ほとんどが島アーティストのポピュラー音楽である。また島アーティストたちがそれぞれ番組をもっている。

あまみエフエムの音世界は、島口・島文化・島イベントについての語りだけではなく、島音楽によって構成されている。島の音楽メディアとして顔がある。これほど、音楽に強いコミュニティ FM も少ない。音楽に強いというよりも、島に関係した音楽文化をとおして島内・島外に島の「おもしろさ・かっこよさ＝文化的価値」を発信しつづけている。あまみエフエムの音楽系番組を作表したものが表３である。

表３：奄美関連アーティストによる音楽番組

アーティスト	番組名	放送時間
ヤマケン	The show must go on!	月 16：00〜16：30
我那覇美奈	よりみち日記	火 16：00〜16：30
カサリンチュ	ただいまカサリンチュです。	火 20：00〜20：30
South Blow	風待ろまん	水 16：00〜16：30
平田　輝	ガンガンレディオ!!	木 16：00〜16：30
ゆーきゃん	夜分にすみません	木 22：00〜22：30
中　孝介	拝みレディオ	金 16：00〜16：15
ティダ	ドゥクサレしもれよ〜	金 16：15〜16：40
元ちとせ	Do you know me?	金 22：00〜22：30
村松　健	夕すだみに Slow	土 16：00〜17：00
	シマラガ Radio	土 22：00〜22：30

※あまみエフエムの HP より：（2016.8.30）／番組は全て再放送がある。

元ちとせ・中孝介・カサリンチュを始めとして、他のアーティストの何人もが、全国的にツアーを行うアーティストである。そうした島外でも活躍しているメジャーデビューの音楽アーティストが毎週番組をもっている。札幌などの大都市部にはたんさんの音楽系アーティストがいて、以前活躍したことのあるアーティストがコミュニティ FM で番組をもつケースは多い。しかしこれだけ現役で活躍中のアーティストが、出身地とはいえ離島のコミュニティ FM で番組をもっていることはあまり例がない。こうした歌の文化資源に恵まれていることも、あまみエフエムの個性の重要な一面である。

現在はライブハウス ASIVI を運営するアーマイナープロジェクトに移管されたが、NPO 法人は、最初はディ！レコードを事業としていた。（※奄美の音楽産業、地場のレーベルについては、別稿で再度触れる。）2005 年 9 月 7 日に中孝介の「マテリア」、2005 年 12 月 24 日に島唄漫談ユニットであるサーモン＆ガーリックの「ハブマンショー」を出している。以後はアーマイナープロジェクトに移管され、島のポピュラー音楽とでもよべる様々な CD を出し続けてきた。

●個性３：イベント発信ラジオ

あまみエフエムの更なる個性は、キャンペーン力やイベント力の強さということだろう。島で行われる大きなイベントは、文化センター、名瀬公民館、奄美パークやりゅうゆう館などで開催されるが、そうしたイベントのキャンペーン、また行政からのさまざまなお知らせ・イベント告知のキャンペーンなど島人への呼びかけが多いことも大きな特徴である。行政の告知は、住民を限定にした、月一回、世帯単位での広報配布に限られる。新聞メディアは、購買者のみに対する文字による告知・広告に限られる。ケーブルテレビも、契約者のみを対象にした、お知らせ放送である。これに対して、ラジオは、ラジオを聴いている不特定多数（といっても島内なのでかなり限られるが）に対して繰り返し声による呼びかけの語りがあ

り、さらにゲストなどを招いて宣伝のための語りの場を設けることができる。あまみエフエムは、島最大のラジオとして、また島の人口の多くのをカバーするラジオとして、ラジオの情宣力を遺憾なく発揮している。情宣力という点では、島内の他のメディアを圧倒しているといえるかもしれない。

また自社による音楽イベントの中継や他のイベントの中継も多く、ラジオというメディアの特性でもある〈身軽さ〉・〈機動力〉が遺憾なく発揮されている。コミュニティ FM にとっては活動が可視化されることがかなり重要であるが、そうした可視化という点も島のメディアの中で出色の存在であろう。ライブハウス ASIVI のイベントの強力な宣伝媒体にもなる。音楽イベントは、あまみエフエムが主催するものもあれば、アーマイナープロジェクトが主催するものもある。チーム麓事業の両輪が回転することで、相乗効果が発揮されている。音楽産業と連動して事業を展開しているケースもコミュニティ FM 局としては珍しい。こうした音楽やイベント、そして情宣力・広報力は、ライブハウス発のラジオ局の個性であり、元々ミュージシャンであった麓氏の事業の個性といえよう。

●奄美豪雨災害と島外とのつながり

あまみエフエムの個性について三つの点を指摘した。奄美という地域の文脈の中で、あまみエフエムがどのような立ち位置を選択し、それがどのようなミッションにもとづき活動し、いかなる機能を果たしてきたのかに関心をもってその特徴を抽出してきた。あまみエフエムが、日本の 300 以上あるコミュニティ FM の中で、その掲げているミッションと地域のなかの評価において出色の存在だからである。逆にいえば、このモデルがどこでも当てはまるということではないのかもしれない。しかし、そこに、奄美の特殊性だけではない、コミュニティ FM にとっての普遍的な要素もまた含まれている。その意味では、コミュニティ FM のひとつの教科書であることは間違いない。

最初から好感をもって迎えられたあまみエフエムだが、地元での評価を飛躍的に高める転機となったのが、2010年10月奄美豪雨災害での活躍である。開局から3年半ほどして発生した南の島では珍しい集中豪雨による災害において、ラジオの力が遺憾なく発揮された。島のラジオが、営利事業としてだけではなく公共財として機能することを見せつけた。それまで、ライブハウス（いわば飲食業）から始まる若者の事業というイメージがあった麓氏の事業が、社会のインフラとして役に立つことを見せつけたことになる。コミュニティFMは、会社であれNPO法人であれ広く社会的評価・支持がある事業が持続し成長することは既にのべた。奄美豪雨災害は、結果としてその社会的評価を格段に高める転換点だったのである。

社会的評価の高さを推測させる、あまみエフエムの災害発生時の活躍に対する表彰を例示しておこう。

2010年12月：職業奉仕賞（奄美中央ロータリークラブ）

2010年12月：感謝状（関西奄美会）

2011年02月：第20回中央非常通信協議会表彰（総務省中央非常通信協議会）

2011年03月：感謝状（奄美市）

2011年04月：感謝状（友和会）

2011年06月：平成23年度土砂災害防止功労者表彰（国土交通省）

2011年10月：感謝状（大島支庁）

2011年11月：第62回南日本文化賞（南日本新聞社）

奄美豪雨での活躍の模様は、鹿児島の民放である南日本放送（MBC）の報道番組（10月25日、NEWS NOW PM6:15～）のなかで6分間ほどの特集コーナーとして放送された。放送は、メインキャスターの「さて奄美市には島の方言で島の文化や生活情報を放送しているコミュニティFM、ディ！ウェーブがあります。」で始まり、災害に関する情報を提供しつづける様を紹介した。コーナーのタイトルは、「奄美豪雨災害　不眠不休のラジオディFMの奮闘」、そして特集の間、「“島民を繋いだ”不眠不休のラジオ

局」の小文字が左上に表示され、シーン展開に沿って次のようなテロップが続いている。

24時間生放送で災害情報を伝える／20日の午後から通常放送を災害放送に切り替えた／麓さんはずっと局で寝泊まりしている／パーソナリティとディレクターが交代／安心、安堵の時間を作りたい／東城小中学校の生徒へのメッセージが届いた／現在の中学生が小学生の時に歌った唄／番組出演者である名物おばぁの声を届けたい／連絡がとれた！／（おばぁ）まぁ～洪水だよ／（おばぁ）公民館で二晩／（おばぁ）山が崩れて泥まみれよ／ディレクター元井康介さん／住用町城集落／放送していた方が皆の役に立つんだったらそっちのほうがいい／差し入れにくる人たちが／応援メッセージもたくさん寄せられた／届いたメールは800通を超えた／地元のラジオ局でしかやれないことってたくさんあるなと／特別放送は24日午後8時まで続いた

もともと南日本放送は、災害の直前にあまみエフエムに第43回MBC賞を授与しているが、災害放送の直後にその活躍を県内に紹介したのである。すでに地域メディアは、地域内だけのメディアという側面だけではなく、〈島外からのまなざし〉と接合することを、〈マスメディアとの接合・共振の回路〉という言葉で指摘してきた。あまみエフエムの活躍もまた、この好例である。島内で活躍するだけではなく、ひろく島外との接合をもって活躍し、そのことが評価をより螺旋的に高めてきたともいえる。

こうした側面は、この災害放送とあまみエフエムの活躍を詳細に事例研究した古川柳子の研究でも指摘されている。あまみエフエムから鹿児島の南日本放送への災害情報の提供は、鹿児島の放送局を超えて、さらに東京キー局との中継へと拡散している。

奄美大島内への災害放送と平行して、コミュニティ FM の電波が届かない地域への情報発信も行われた。麓は、20 日の 13 時過ぎにあまみエフエムに送られてきた住用地区の被害写真を、日頃から取材で連携があった鹿児島市の南日本放送の北原由美ディレクターに転送した。この写真によって奄美大島の水害の深刻さを知った北原は、南日本放送の報道部に伝達し、急遽奄美大島への取材体制が整えられた。系列の東京キー局 TBS にも連絡が入り、その夜の「ニュース 23」での中継準備が進められることになる。（古川柳子、2012、113 頁）

スタッフの一人と東京キー局との人的関係も指摘されている。

22 時、全国ネットの「報道ステーション（テレビ朝日系）」のトップ項目で、中原が「奄美市と災害協定を結んでいるあまみエフエムのパーソナリティ」として被害状況を電話中継した。中原は東京のテレビ・プロダクションでアシスタントディレクターの経験があり、知り合いだったプロデューサーの一人から連絡を受けたことがきっかけだった。（古川柳子、2012、114 頁）

この災害では、あまみエフエムの〈島内のまなざし〉が、全国放送という〈島外からのまなざし〉と接合・共振することで、災害がいち早く全国に認知された。それが奄美出身者・関心者からの応援や問い合わせにつながっている。遂に、あまみエフエム側も、インターネットでラジオ番組を配信していくようになる。こうした情報拡散のプロセスを古川は、次のように説明している。

本事例で興味深いのは、マスメディアへの被害状況の第一次情報が地域コミュニティFMから発信されたことだ。この情報発信は、麓や中原の個人的ネットワークが基点となっており偶発的な要素も強い。だが、麓が被災写真を南日本放送の北原に送った背景には、取材を通して北原との信頼関係があったことに加え、南日本放送が地域メディアとの連携強化を目指しており、日常的な人的交流が築かれていた要素も無視できない（古川柳子、2012、118頁）

古川のこうした指摘は、地域メディアが地域内で情報を地産地消するだけの存在ではなく、外部との接合やクロスメディア的展開によって開放的な関係をもつこともありえることの証しとして貴重である。もちろん、地元における〈島内のまなざし〉の中での評価と〈島外からのまなざし〉の評価にはズレもあるのかもしれない。しかし、あまみエフエムの日常放送の営みはどこまでも〈島内のまなざし〉のそれであり、そうした〈島外からのまなざし〉に左右されてあるわけでもない。日常放送が評価されているという基盤の上に、たまたま災害放送での活躍が加わったのである。災害とコミュニティFMとの結びつきは、コミュニティFM評価の物語として分かりやすいが、コミュニティFMへの評価は、どこまでも、日常放送としてのあり方を基本にして考えるべきだろう。そうした日常放送への評価は、南日本放送の災害報道の特集の最初に語られた、「島の方言で島の文化や生活情報を放送しているコミュニティFM」という語りのなかにもよく現れている。

●補足：NHKが描いたあまみエフエム

コミュニティFMは、物語性の強いメディアである。地域密着、コミュニティづくり、地域を元気する、市民参加など、報道関係者を魅了するキーワードにこと欠かない。しばしば県域の放送局による番組によって地元の

コミュニティ FM のコーナーや特集番組が制作され、時には全国に放送される。そうした中でも、あまみエフエムは、島外のマスメディアによって最も取り上げられるコミュニティ FM の一つでもある。NHK の番組を例に、〈島外からのまなざし〉の中であまみエフエムがどう語られたかを見ておこう。

代表的な番組に、「関口知宏の Only1　ラジオよ　奄美の心を燃やせ」（2010 年 9 月 18 日・25 日）と「新日本風土記　奄美」（2016 年 1 月 15 日）がある。

「関口知宏の Only1」では、やはり島口放送が大きく取り上げられ、麓氏が、ラジオを開局するに至った物語が説明される。内容的にはすでに紹介したあまみエフエムをめぐるストーリーと同様である。

番組の冒頭では、「島ッチュの島ッチュによる島ッチュのためのラジオ」「徹底的に島に密着した放送」が語られる。この番組は、ユニークな生き方や活動をしている人に焦点を当てた番組であり、麓氏の語りや実践が随所に挿入されている。

ラジオは聞こえるが、鹿児島からのラジオだと情報にリアリティがないため、言葉のニュアンスも変わってしまう。都会に出て行ったことで島の豊かさに気づき、この文化の輝きを皆に伝えたいと思いラジオ開局へとつながる。カッコイイものの絶対的なものがそこにある。島のものが古くて間違っていると感じていたが、都会に行って戻ったことで自分が住んでいるところのどこが悪いと感じた。音楽イベント（夜ネヤ、島ンチュ、レスペクチュ！）を始めたころは、奄美出身だといえないコンプレックスを持っていた。でも、今では島の中で島のために活動したいと思った。こうした語りに、司会の関口は、「コンプレックスが誇りに変わる瞬間」と語る。

カサリンチュのイベントでは、「私も奄美で夢をかなえたい」という語りが紹介され。それに続いて麓氏が、「島を出ないと夢をかなえられないと思っていたがそうではない。井の中の蛙のにぎやかさを見に来て欲しい」と語る。

この番組を社会調査（テーマ「映像の中の奄美」）の実習で分析した中京大学の学生(当時３年生)は、一度都会に出て、その後島に戻ってきて、島の良さを再確認し島への愛着が増すという流れが、島人の通る道なのかもしれないと認識したうえで、次のように感想をまとめている。

この番組で描かれていたのは、人のために熱くなる。自分の故郷のために熱くなる人がこんなにもいる！！ということだと感じられる。それは、ごく自然に麓という男でたとえられていて、違和感を感じない。オリーワンでありながら、彼は島一熱い男だと表されているのだ。…この番組だけみれば麓という男は島のために一生懸命になる男であり、奄美という島は一生懸命になろうと思わせる島だということである。…“島”でなければ成功しないシナリオだったように思える。（林真美、2016、108～110 頁）

「新日本風土記　奄美」では、祭り、儀式・風習、行事・相撲、祈り、先祖迎えのお供え、神様の迎え、神聖な場所、島唄、島口などのシーンを通じて、奄美が神・命・心の島、豊かな精神世界をもった島として描かれている。その島口の文化を代表するシーンにあまみエフエムが取り上げられる。「小さな島のラジオ局」でナレーションが次のように語る。

・ここは、島人による島人のためのラジオ局。地元の若者がはじめて８年になります。向かいは魚屋さん。なんでも放送のネタに。
・放送で使うのは、奄美の方言、島口。たとえば、子供達が郷土芸能を披露したニュースはこんな具合。
・ラジオ放送を始めた理由の一つは、失われつつある島口の魅力を伝えることにあります。奄美では、本土復帰後、子供たちが方言を使

うことを、昭和40年代まで、多くの小中学校で禁じていました。
・このままでは忘れられてしまう奄美伝統の暮らし。

NHKという〈島外からのまなざし〉の中でも、あまみエフエムは、島おこしの青年の物語、そして固有の文化が濃厚な島、苦難の歴史をもつ島で、島の文化である島口の継承に使命感をもって取り組む姿を描きだしている。麓氏らの語りという〈島内のまなざし〉と〈島外からのまなざし〉が自然なかで軌を一にしており物語にブレはない。これからもあまみエフエムをめぐる評価の軸は、こうした物語として描かれていくことになろう。

3節　ラジオの島：4局もある島ラジオ

●島のラジオ局を支える奄美通信システム

奄美のラジオは、どうしてもあまみエフエムに代表されてしまう。しかし、あまみエフエムのように〈島外からのまなざし〉からも注目されるコミュニティFMの他に、奄美大島には別の個性をもったコミュニティFMが3局もある。沖縄島には18局（2016.12.31現在）もあるから、その6割ほどの面積の奄美大島に複数局があってもおかしくはないが、沖縄島は100万人を超える人口を抱えている。奄美大島の人口6万人を考えれば、四つのラジオ局は驚異的でもある。ともかくも、あまみエフエムがつくりだすラジオ空間以外のラジオ空間と接している島民がいるということを忘れてはならない。

表 4. 奄美大島のコミュニティ FM 一覧

ラジオ局名	開局	所在地	人口規模	パートナー（支援）事業体
あまみエフエム	2007.05.01	奄美市	43,184	アーマイナープロジェクト
エフエムうけん	2010.01.04	宇検村	1,718	宇検村
エフエムせとうち	2012.04.25	瀬戸内町	9,050	瀬戸内町・瀬戸内ケーブルテレビ
エフエムたつごう	2014.05.24	龍郷町	5,809	奄美通信システム

※人口は、2015 国勢調査より

奄美大島に 4 局ものラジオ局が可能だった最も重要な背景は、島に電波機器を扱う専門の会社があったことである。そうした会社の存在もまた島の大きな文化資源である。笠利出身の椛山廣市氏が 1975 年に起業した電波関係の専門会社である株式会社奄美通信システム（通称、奄通・社員十数名）がそれである。会社の概要説明書には、「離島なればこそ活かせる通信専門技術力 41 年」のコピーが掲げられている。奄通は、1975 年に漁労船舶電子機器販売事業を扱う「有限会社　奄美無線サービス」としてスタートし、その後、陸上通信機器販売も開始し、1990 年に現在の社名に変更して今日に至っている。通信無線、防災無線、放送関係の送信所といった電波系施設の設置・メンテナンスの専門会社である。通常こうした企業は県庁所在地にあるが、鹿児島から遠距離にあり緊急時に鹿児島から人を派遣していたのでは対処しきれないロケーションから生まれた専門企業といってよいのかもしれない。高い山があり地形が複雑な奄美大島には NHK だけで 25 箇所、民放 17 箇所もの中継所があり、また与論島にいたる放送電波の中継地ともなっている。そうした群島全体の中継所の設置や保守管理には地元の地形を知り尽くした地元の企業が必要なのである。ある鹿児島の民放関係者は、「椛山さんがいないとできない」と絶大な信頼をよせていた。奄美通信システムは、鹿児島の放送関係社にとっては、い

わば島の技術拠点のような役割を果たしている。当然、総務省と日常的で良好な関係を保たなければならない企業でもある。NHK からは電波功労賞という大きな賞ももらっている（取材：2011.03.07、2014.03.13）。

椛山氏がコミュニティ FM にかかわるきっかけは、ラジオ局開局を考えていた麓憲吾氏が人を介して椛山氏を紹介されたことから始まる。あまみエフエムは、いわば出資も含めて、番組ソフト面に強い麓氏と技術面に強い椛山氏がチームを組むことで設立が可能となったと言ってもよい。コミュニティ FM の開局にはしばしば県庁所在地などの有名コンサルタントが介在し、県域局のラジオ局をモデルにして高価で豪華な施設を作って始めることが少なくない。最近では開局の資金的ハードルがかなり低くなったとはいえ、地元に、音響に詳しいアーマイナープロジェクトという会社と、開局申請に必要な電界調査などを実施できる電波に詳しい奄美通信システムという会社があったこと。その代表同士がコミュニティ FM というラジオの開局にタッグを組んだこと。これが奄美でのコミュニティ FM 開局を資金と技術面で支えたのである。

あまみエフエムでの開局経験を活かして、椛山氏は、その後エフエムうけん、エフエムせとうち、エフエムたつごうの開局を主導していく。これら島内の三つのラジオ局は、椛山氏の事業企画とラジオを必要としていた自治体が連携することで誕生している。

防災無線の設営を業務としてきた椛山氏にとって、コミュニティ FM の開局は技術・施設的にはそう時間のかかる仕事ではないという。ラジオという有効な情報手段を、防災無線の代わりに、あるいは併用して普及させ、「群島が電波でつながること」、それは技術者としての椛山氏自身の夢・ミッションでもある。人口の少ない経営が成り立たない島の場合、ラジオ局の設立と維持には自治体の協力が不可欠である。逆にいえば自治体の協力さえ得られれば可能な夢でもある。宇検村で実現した自治体が支援する小さなラジオ局は、「小規模自治体向きの公設型コミュニティ FM モデル」であり、それが椛山モデルの雛形になっている。

私は防災無線でお世話になっているし、コミュニティFMは商売にはしたくないという考えなんです。それで始めたのが宇検村です。こんなに便利な情報手段があるのだから。ビジネスにしたいとはまったく思っていない…。群島が一つにつながってくれれば。一つの夢ではありますけどね。自治体の考えが変わってくれれば、実現可能な夢です。特に離島は経営ができないから、役所の応援がないと…。（取材 2014.03.13）

奄美通信システムという企業があったことで、島には四つものコミュニティFMが立ち上がることができた。そうして出来た四つの局は、今ではそれはそれぞれの自治体にとっての重要な島語りの文化装置となっている。

もちろん、コミュニティFMにどれがもっとも適切なやり方かという正解はない。後にみるように、あまみエフエム、エフエムうけん、エフエムせとうち、エフエムたつごうとみんな抱えている事情が異なる。純民間型のあまみエフエム、エフエムたつごうもあれば、公設民営型のエフエムせとうち、エフエムうけんもある。ただ、共通しているのは、表4でも示したように、小さな自治体ではコミュニティFMという事業が単独では成立していないということである。必ず、パートナーとなるような事業体があり、その支援のなかで事業が成立している。民間企業であれ、自治体であれ、小さなラジオ局が持続するためには、そうしたパートナー事業の支援が必須の要件になっている。つまり、椛山モデルは自治体の支援を必須にしているモデルでもある。

奄美大島の6万人という人口規模だけを考えれば、一つのコミュニティFMで足りると考えることもできる。島にひとつの島ラジオでも構わないのかもしれない。しかし、奄美大島という島の規模、その地域的多様性からも、平成の大合併を経ても、一島一自治体にはならなかった。そして、

現実には自治体が競い合うように複数のラジオ局が並立している。

番組構成も、部分的には他の局と番組を連携しあい、部分的には独立した編成をとって放送している。エフエムうけんとエフエムせとうちではあまみエフエムの番組が流れるが、エフエムたつごうでは流れない。エフエムうけん、エフエムせとうち、エフエムたつごうでは、鹿児島の民放の民放 AM・エフエムも流れている。あまみエフエムとエフエムたつごうは、隣接し一部電波が重なっている民間ラジオ局であるから、経営的には競合することになるから当然といえば当然である。それは、奄美大島のなかで、あまみエフエムが流れないエリアがあるという見方ができる一方で、あまみエフエム以外の番組の選択肢があるエリアがあるという見方もできる。沖縄のコミュニティ FM の多くで放送電波がかぶり合っているように、人口が限られた奄美大島にある二つの民間ラジオ局は、しばらくは併存しあい、一部競合しあっていくことになるだろう。

●日本初の公営型ラジオ・エフエムうけん

あまみエフエム開局から 3 年後の 2010 年 1 月 4 日、人口 1800 人余りの小さな村、宇検村にコミュニティ FM が開局した。すでに述べたように、奄美大島にコミュニティ FM が 4 局開局できたのは、あまみエフエムの開局をサポートとした奄美通信システムの椛山氏の企画提案力が大きく作用している。

宇検村は、二つの事情を抱えていた。一つは、防災無線の戸別受信機の更新である。二つ目は、ラジオがない村であったという事情がある。戸別受信機を高い費用をかけて全家庭に設置するなら、もっと安い費用で村のラジオ局を開設し、防災だけではなく、日常においても情報発信機能をもつことで村の生活のために活用したいと考えるのは当然であろう。

村は台風などの時に、よく停電する。3 日間、時には 5 日間も停電する。1 台 5 万円もする防災無線の戸別受信機は乾電池でも動くが、何年も入れっぱなしにして乾電池が腐食すると本体が故障してしまう。乾電池が液

漏れして故障した戸別受信機が何割にも達することになる。5000万円かけて戸別受信機を更新しても10年後には同じ問題が発生する。長期停電がある村には、戸別受信機は便利ではあるがやっかいな問題を抱えたメディアなのである。

ラジオなら、普段の情報に加えて、防災情報は放送への割り込みという形で送信することもできる。いまでは当たり前のようになっている、Jアラートの緊急割り込みがまだ始まっていない時期に、防災放送と日常の地域生活情報の放送とを兼ね備え、しかも村民の娯楽やコミュニケーションを促進するラジオを企画し、総務省を説得して始まったのが宇検村のラジオ局、エフエムうけんである。Jアラートの通常放送への割り込みも、奄美通信システムが格安のシステムを開発する形で導入して災害に備えている。（取材：2010.03.28、2013.08.15、2015.09.04、2016.09.12）

ケーブルを使って契約者に声や映像を届ける有線放送事業とは異なり、電波の放送は役所が直営することができない。その制度の壁を越える方策がNPO法人である。2009年にラジオの開局の準備とNPOの設立の準備が一気進められた。ただ、村役場がラジオ局を開局し運営するために設立したNPOであり、NPO自体の構成員の多くが村役場の職員であることを考えればNPO自体が公設NPOである。だから、公設ラジオ局をNPO法人に委託して運営しているという意味でかたちは公設民営ではあるが、実質的には村のラジオ、村民のラジオと言ってよい。中心になっている村職員も仕事外の時間でのボランティア参加ではあるが、ラジオへの参加自体が村の施策に沿った活動でもある。役場の“部活動”のような明るくのびのびした雰囲気のあるこのラジオ局は、局の開局と維持が村の政策として展開されているという意味で、まさに村が運営するラジオなのである。制度的には公設民営であるが、対外的にも日本で初めての公営的なラジオとして、小さな村だからこその特別の事情として理解を得ている。

独自の現金も財産ももたないのでNPOの会計報告も簡単である。役場からの補助金として人件費として年間200万と広報費年間96万（月8万）

が支払われ、それ以外の経費は全て村が負担する。つまり年間300万円で運営する村のラジオ局である。当然、CMもない。施設は、元法務局の支所の建物を村が買い取り無償で賃貸し、設置機材は更新も含めて施設は村の資産として村が管理する。

写真：エフエムうけんの外観（撮影：加藤晴明、2013.8.15）

人口が少ない小さな自治体にとって、宇検のラジオ利用は、まさに防災と地域活性化のモデルとなる。ラジオがいろいろな用途で地域に役に立つことは理解しやすい。それを経営が無理な小さな地域でいかに実現し持続するか。宇検モデルはそうした、経営困難な極小地域におけるコミュニティFM導入の日本初のモデルでもある。村に開局したラジオとしては、青森県の田舎館村（人口8千人余）のコミュニティFMジャイゴウェーブや読谷村（人口が4万人を超える日本一人口の多い村である）のエフエムよみたんが知られているが、宇検村は人口が2千人を割っている。民間資本による設立どころか、純然たる民間による運営自体が無理な地域でもある。そういう村では、官民を問わず住民総出で盛り上げるような“ノリ”が求められる。

防災無線の更新は日本の地方自治体がどこも抱えている課題であるが、だからといって代替したコミュニティFMがどこででも地域に愛される局となるわけではない。日本初の公営的なラジオを成功へと導いた要因は幾つもある。

①あまみエフエムがあったこと。

奄美大島の各自治体にとって、あまみエフエムというラジオの登場とその活躍という成功例があったことが大きな刺激となった。ラジオの有効性・威力に気づかされたということでもある。また開局や日常運営において、放送の乗り入れや運営のサポートが得られることも大きい。あまみエフエムは、スタッフの充実度や番組の質においても島全体にとってキー局のような存在だからである。

②企画提案と設置・保守ができる企業である奄美通信システムがあったこと。

そもそもラジオが防災無線の代わりになるという企画提案自体が、あまみエフエムの設置に関わった奄美通信システムの椛山氏から始まっている。大都市のコンサルタントではなく、地元に密着し、地形を知り尽くし、防災無線を始めとして日常的に通信システムをサポートしている企業の存在は極めて大きい。

③村役場の首長・スタッフに先見性と実行力があったこと。

エフエムうけんは奄美通信システムの椛山氏と、この事業推進の中心人物となった宇検村総務企画課の課長補佐（当時）渡博文氏（1961～）や村長（当時）の國馬和範氏（1952～）、役場スタッフという役場側とがコラボしあって作動したプロジェクトであった。あまみエフエムの経験を踏まえて、ラジオが防災無線の代わりになり、さらにそれ以上の使い方ができると考えた椛山氏の企画提案力と、そのメリットを合理的に評価して受け入れた結果のコラボでもあった。中心的役割を担った役場の渡氏は、「何も知らなかったから出来た」というが、当時の國馬村長が「防災無線はラジオに切り替えます」と表明を出してから1年ちょっとで開局にこぎつけ

たということは、かなりの突進力であったことが想像される。役所の前例主義の壁を突破し、総務省が想定もしなかった日本初の小さな自治体での公設民営ラジオ局の試みを許可に導いたのは、椛山・渡両氏の力と人的ネットワークによるところが大きい。

④日常的にラジオ局を管理運営する適切な人材に恵まれたこと。

渡氏は、「うちの一番の成功の要因は、事務局長の向山さんです」とハッキリと語る。事務局長の向山ひろ子氏は、島外の方であるが結婚して村に住み着き、子育ても一段落した女性である。キーボード操作も得意といえなかった氏が、録音・放送から、自動運行装置のプログラムを組むまでの高い能力を身につけるようになったのは役場としても大きな驚きだったという。そして、誰もが気さくに訪ねることのできるお茶飲みサロンなような雰囲気も、その人柄によるところが大きいが、その背景にあるのは、公費で運営され、ビジネスと無縁であることだろう。経営を考える必要のないラジオ局。これほど楽しいものはない。

エフエム宇検の成功の背景には、もうひとつ重要な要素がある。

⑤ラジオが聴けない村（無ラジオ地域）であったこと

エフエムうけんの成功は、もともとラジオを聞く慣習のない村であり、開局によって村民が初めてラジオという驚きのニューメディアと接したことも大きい。まさに、「村にラジオがやってきた」のである。実に 1963 年に奄美でテレビが開局してから 47 年後、つまり約半世紀後に、エフエムうけんの開局によって、村では初めてラジオ時代が幕を明けたのである。

●エフエムうけんの室内（撮影：加藤晴明、2015.9.4）
※気軽に来訪者を迎えるアットホームな雰囲気の事務所
社会調査実習で取材中の加藤ゼミ生たち

もともとラジオを聴く慣習のなかった村には、ラジオそのものが普及していなかった。そのため村は、最初、補助金を出して各戸1000円の負担だけでラジオの普及を図った。さらに最近では、村内の難聴地域を解消するために高感度の防災用のラジオを配布して、現在では村内100％でラジオが聴けるようになっている。

村内で聴ける唯一の民放ラジオという電波の受け入れられ方は、ラジオの選択肢が沢山ある地域と大きく異なる。そうした幾つものラジオ波がある地域で仮に公設ラジオを開局しても、たぶん宇検のように地域に定着して高い聴取率を獲得するのは難しい。

日本国内にはまだラジオの届かない地域がある。これは意外と知られていない事実である。奄美大島内でも、高い山に囲まれた宇検もその一つであった。同じように無ラジオ地域であった大和村、住用村（2006年に合併して奄美市）の奄美大島南部3村が一緒になりNHKに要望して、宇検ではようやく2007年からNHKのFMだけが聴けるようになっていた。コミュニティFM開局の3年前である。しかし、鹿児島からのNHKのFM番組の多くは福岡や東京で制作された番組であり、身近なラジオとはいえ

ない。だから、エフエムうけんの開局によって、村民に初めてラジオを聴く慣習が生まれ、生活のなかに「ラジオ文化」が醸成され始めたのである。

●エフエムうけんの番組構成

村で聴くことのできる唯一の民放ラジオ。このことは、番組の構成にも個性として表れている。小さな村では、当然のことながら自主制作番組だけで放送時間を埋めることはできない。さらに村内には鹿児島から赴任してきている教員・公務員もいる。奄美市のように、鹿児島の民放が聞こえるわけではない。そこで考えられたのが、あまみエフエム以外に鹿児島の民放ラジオのMBCを混ぜた番組構成である。

コミュニティFMが県域放送のラジオを流すというのも極めて珍しい。宇検村で放送が流れるようになってから、MBCの側も宇検で流れていることを意識して、アナウンサーが島口の挨拶を覚えたり奄美を意識した発話もする。エフエムうけんの番組スタッフが、たまにMBCの番組に出演することもある。これは本土・鹿児島のリスナーに“あまみ”というサウンドを届けることになり、とかく離島に関心のない鹿児島本土の人々に奄美を意識させ、奄美情報を発信していることにもなる。

コミュニティFMは、音楽などのテーマ番組を除けば、それぞれの地域に準拠した情報が多くを占めているから、宇検村で鹿児島の繁華街の天文館の交通情報を聴いてもリアリティはない。確かに、奄美大島を車で走りながらラジオを聴いていても、MBCに切り替わると放送の質が突然県域レベルのプロのしゃべりに代わるので、聴いていると違和感がないわけではない。ただ、鹿児島から来た転勤族の人達にとっては懐かしい放送でもある。また村民は、初めてMBCという鹿児島県を代表する民放ラジオの存在を知ったことになる。

表5からも分かるが、エフエムうけんの番組は四つのラジオ局の番組から構成されている。これも、全部を自主放送で埋めるように制作ができないことや無ラジオ地区であることからくる特性でもある。つまりエフエム

うけんでは、一つのラジオ波で、幾つものラジオ文化を提供していることになる。渡氏は、「民放はこれしか聴けないんだから、混ぜるしかない」と割り切っている。住民サービスという考え方であろう。

もともと県域局は県内全域をカバーする放送電波を発しているわけであることから、コミュニティ FM といえどもライバル局となる。だから、離島などの場合以外にはこうしたことは考えられない。[5)]

表 5. エフエムうけんの平日の番組構成

放送局の位相	番組名	放送時間
自主放送①	しまの情報コーナー（10 分×5 回） ゆんきゃぶりー（20 分×4 回）	130 分
自主放送②	音楽番組（島唄 120 分・演歌 10 分 洋楽 30 分・J ポップ 360 分）	520 分
同格の兄弟局 （各町情報）	エフエムせとうち制作番組（30 分） エフエムたつごう制作番組（30 分）	60 分
島内キー局 （島内情報）	あまみエフエムの朝・昼・夕方の 帯番組といろいろな個別の番組	540 分
県域局（県内情報）	ＭＢＣの 3 つの番組（60 分×2+30 分） エフエム鹿児島の番組（40 分）	190 分

※月～金の場合（2015.04.01）

自主番組は、お知らせ番組である「しまの情報コーナー」（10 分）の他に、自由なトークの収録番組「ゆんきゃぶりー」（20 分）である。「ゆんきゃぶりー」は、沖縄のゆんたくに近く、おしゃべりという意味の宇検の島口である。「情報コーナー」は月曜日から土曜日まで、1 日 5 回、「ゆんきゃぶりー」は 4 回放送（7 時 10 分、14 時 10 分、17 時 10 分、20 時 10 分）される。日曜日には、1 週間の自主番組をまとめたものを午後と夜に流すので、一つの「ゆんきゃぶりー」番組が 6 回放送されることになる。

「ゆんきゃぶりー」の時間帯には、さまざまな番組が放送される。「レ

ジェンド」「今日はなんの日」「あんまーの知恵袋」「学校だより」「岩元塾」「読書の部屋」「ラジ友」「晴れたらいいね。「特番」「ヒゲーション」「土曜日はちょっとひと休み」などである。番組担当者は、それぞれの都合よい時間に来て、収録していく。最初10人未満で始まった自主制作番組も、いまでは20人近いメンバーが参加して制作が続いている。また村民全員を出演させたいということでなんらかの形でのラジオ出演を勧め、ほぼ7割近い村民が出ているのではないかという。そもそも村役場の職員は、皆“しゃべれる”ことには慣れている。村に残った貴重な若い人材である職員は、集落の青年団や壮年団、PTA等で必ずといっていいほどスピーチをする機会がある。村に残って活躍している青壮年は、人前でしゃべるスピーチのリテラシー（資質・能力）を身につけているのである。

村民の中には、番組の繰りかえしが多いという意見もあるが、村の中の人気者を輩出することもある。そんな代表が村の30代の青年イカリング隼人氏のトーク番組や「マニアックさんいらっしゃい」であった。敬老会や結婚式での余興文化の盛んな土地柄の奄美では、最近不定期で余興グランプリ大会（Y1グランプリ）が開催されるが、イカリング隼人氏は、宇検代表で出場する余興の達人でもある。

各番組も、若者向け、高齢者向けとバランス良く配置されている。そのため村人も、自分が聴く番組と聴かない番組に線を引いている。ラジオが定着して、聴きたくない時には、聴かないといったかたちで耳が肥えている。

ラジオは、村なりの使い方もされる。人のいない畑で一晩中大音量でラジオが鳴っていることがある。猪除けである。猪も人の声がすると畑に近づかないという。防災ではなく猪対策という使われ方は、ラジオをやってみて初めて分かった使われ方であった。

ともかく、村にラジオがやってきて7年余り。ラジオは村に確実に定着し、村民もよく聴いている。村民の満足度は高く、役場の担当者は村民から「たまにはいいことするね」と褒められたという。

ほんとうにうまくいきましたよ。今はこれがなかったら…。他の局とは電話回線で繋いでいるので、たまに通信障害があると、クレームではなくて、知らせてくれるという意味ですぐに連絡が来ますからね。助かります。…続けてやっていきたいですね。（渡　博文氏、取材：2016.09.12）

「町や村に、ラジオがあることの幸せ」。エフエムうけんは、村民同士がほぼ知り合いだからできる実にのびやかさのあるラジオである。放送の中では個人名も飛び出す。村内5箇所には、リクエスト箱も設けられているが、ラジオでしゃべっている側も誰のリクエストかだいたいわかっている。こうした濃密な人間関係のある村内だから許されることを、村内という文脈の上で実践しているラジオでもある。だから、出身者の会である郷友会などからの要望があっても、〈島外からのまなざし〉にさらされるインターネット放送は実施しない。手を上げて外から表彰されることもしない。できるだけ“目立たないように”自分達で楽しむという姿勢である。それは、まさに小さな村の特性に見合った、その地域の文脈に沿ったメディア実践でもあり、安易に真似の出来ない個性でもあろう。

●エフエムせとうち：ラジオの島の難問を背負って

奄美大島で3番目に開局したのが、エフエムせとうちである。奄美大島の最南端の町である瀬戸内町は、かつては2万あまりの人口を誇っていたが、現在は1万人を割り9000人台である。それでも人口は隣の宇検村の4倍以上。人々の社会関係も含めて、宇検村とは事情がかなり異なっている。南大島のこの町に、エフエムせとうちが開局したのが、2012年4月25日である。

エフエムせとうちは、宇検村で成功した事業をモデルに、予算措置・規模も含めて同じようなかたちで展開した公設民営型のラジオ局である。宇

検モデルは、奄美通信システムが機材・事業をデザインしているので、奄美通信＝椛山モデルといってもよいのかもしれないが、実際の事業運営は、地元のケーブルテレビである瀬戸内ケーブルテレビが全面的に支えるかたちで運営している。この点でも、エフエムうけんとは町民の受け止め方も違う。役場職員がボランティアパーソナリティとして深くかかわり、村のラジオ局という位置を確保しているのとは異なり、より公設“民営”的な雰囲気のあるラジオ局である。町民のなかには、ケーブルテレビがやっていると思っている人もいるという。さらに、瀬戸内町はもともとラジオ文化がなかったわけではない。難聴地域も多いが、若い時にエフエム鹿児島ばかりを聴いていたというラジオ世代もいる。

地形的に複雑な瀬戸内町では、アンテナを複数設置してもなお難聴地域が残る。事務スタッフは一人いるが、宇検のようなみんな知り合いという村よりも大きい町である。そのせいか、家族的で親密な雰囲気の村のようにラジオで何でも話していいいというわけにはいかない。そうしたこともあり、コミュニティ FM らしいラジオ文化が町民に深く定着するのに時間がかかっている。ある程度定着はしているが、ラジオの存在感やラジオ活動が町民にわかりやく見え（＝可視化）、かつ親しみをもって意欲的に関わってもらえるという点で課題を抱えている。それはエフエムせとうちというよりも、人口１万規模のラジオ局が抱えている構造的な難問でもある。この規模の町のラジオ局が元気に活動するには、スタッフの数も含めてどのような形態の運営が適しているのか。この構造的な難問を抱えながら、それを乗り越えるための実践が続いている。

写真：エフエムせとうちの収録風景（撮影：加藤晴明、2012.9.13）

※奄美の島唄・島口に詳しい元町長が奄美の文化を語る番組。

日常的に運営するスタッフは、宇検同様に、役場の補助を受ける形で一人体制であった。開局時から、ケーブルテレビのサポートを受けながら、若い世代の女性が対応していたが、5年間で辞め次の代のスタッフに引き継がれている。

番組の構成は、エフエムうけん同様に、自主番組、あまみエフエム、MBCの放送を組み合わせることで構成されている。自主番組は、行政・防災情報番組、局としての自主番組（きゅうだろ　きばりんしょろや～！）、そして町民企画番組である。「きゅうだろ　きばりんしょろや～！」は、15分番組で、平日は1日4回放送されている。町民企画番組は20時30分から30分間の番組となっている。

もともと瀬戸内町の中心市街地である古仁屋は、町内の各集落から出てきた人が集まった合衆国のような町であると言われている。戦前は巨大な要塞を抱え海軍・陸軍の軍事拠点でもあった瀬戸内町は、商人も鹿児島商人が多かった。そうした事情からも、集落の文化と市街地の文化との間に地域差がある。ある意味では、繁華街の古仁屋地区はミニ名瀬である。その点では、ラジオもあまみエフエムのような民間ラジオらしい活動や活躍

の可視化が求められているのかもしれない。また人口規模からも人的資源も多いはずである。そうした人材を発掘してユニークな番組づくりを続けていくことが更に求められるだろう。またすぐれた観光資源を抱えた町でもある瀬戸内町では、観光客にも見えるようなビジュアル的に絵になるスタジオも必要なのかもしれない。それには、スタッフの数も必要でもある。一人体制では、そうした地域の中でラジオ事業をより可視化するような活躍もなかなか難しい。

瀬戸内町のラジオは、ラジオの島の難問を背負っている。コミュニティFMは小さなメディア事業であるが、逆に、なぜ、何のためのメディアなのかという明確なビジョンと強力な推進の担い手が求められる。人口1万人規模のラジオ局のコミュニティFMのあり方をめぐって、公設と民間との間をめぐって、あるべき姿をめぐる模索が続くように思われる。

●エフエムたつごう：もうひとつの民間ラジオ局

2014年5月24日に開局したエフエムたつごうは、奄美大島4番目のラジオ局である。この開局により、あまみ大島は、全ての自治体にラジオ局が配置されることになった。（大和村は、あまみエフエムの送信所を設けてあまみエフエムが流れている。）龍郷町は人口6000人台である。瀬戸内町よりも小さいが、宇検村の3倍規模。奄美のなかでは、奄美市のベットタウンとして、また空港に近い町としてＩターン者にも人気があり、島内で唯一人口が増えている自治体でもある。商店街のような都市集積はないが、やはり宇検村とは異なり、共同体集落だけではない多様な地域構造や町民を抱えた町である。

エフエムたつごうの事業主体は、エフエムうけんやエフエムせとうちとの開局をリードしてきた奄美通信システムであり、公設民営ではなくあまみエフエム同様に純然たる民間事業である。人口6000人の町で民間のラジオ局を持続的に運営していくのは難しい。運営の仕組みには、奄美群島内をラジオの電波を繋いでいきたいという強いミッションをもつ奄美通信

システムの椛山氏の工夫がある。奄美通信システムからコミュニティ FM の保守部門（定期保守業務：遠隔監視制御と維持管理）やコミュニティ FM の企画・工事部門の仕事を独立させて、「NPO 法人コミュニティらじおさぽーた」（通称、らじさぽ）という独立事業体（NPO フォーマットの会社と言ってもよいのかもしれない）をつくり、その一つの事業部門がエフエムたつごうを運営するという仕組みを考え出したのである。らじさぽは会社ではないから、NPO の収益は個人に還元されない。この仕組みには、私財を投じてでもコミュニティ FM を設立していきたいという椛山氏の強い意思や、「コミュニティ FM でもうけようとは思っていない」と語った氏のミッション、さらに公益性事業という性格を確保する意図が強く表れている（取材：2015.06.17、2016.09.13）。

全国のコミュニティ FM をみても、事業として持続可能なためには、多くの場合パートナーの事業体を必要とする。表 4 からわかるように、奄美の四つのラジオ局も、そうしたパートナー事業体に支えられて持続している。エフエムたつごうも、NPO 法人の理事長が椛山氏で、ラジオの事務局長は親族であるから、椛山氏のファミリー事業という言い方もできるかもしれない。ただ、それを個人企業としなかった点に、ラジオを地域の公共財として展開したいという企画意図や、ラジオがあることが地域に役立つという氏のミッションを垣間見ることができるのである。

写真：エフエムたつごうの外観（撮影：加藤晴明、2015.9.8）

らじさぽのラジオ部門名であるエフエムたつごうのスタッフは、事務局長、放送局長、メインパーソナリティ、主に営業担当の職員と4人の常駐体制をとっている。スタッフの規模という点でも、宇検村や瀬戸内町のケースとは異なり、それなりにコミュニティFMらしい体制を整えている。CMもとっているが、本体事業をベースにした安定した収入が背後にあるから可能となっている体制でもある。奄美だからこそ可能であった通信工事会社があり、そしてその会社があったからこそ可能なコミュニティFM群がある。エフエムたつごうは、奄美の地域特性が詰まったような個性的な形態のコミュニティFMである。

ただ、持続可能な経営基盤をもっているとはいえ、エフエムたつごうは構造的な困難を抱えているコミュニティFMでもある。

①龍郷町は、奄美市のベットタウンである。ベットタウンのコミュニティFMは、どこでも立地的・経営的に最も困難な事業となる。コミュニティFMは、県庁所在地から遠い、地方の独立圏の都市が好立地である。龍郷町民の生活圏も島の中心地である奄美市名瀬地域と深く重なり合っている。町自身は、歴史も文化も奄美を代表する町としての自負があるが、住民の生活圏の多くは奄美市域であり、奄美市のベットタウンとして人口が増えている。歴史意識と社会構造とのズレでもあろう。

②車で移動する生活圏域の多くであまみエフエムを聴くことができる。奄美市は笠利という飛び地を抱えているので、龍郷町はあまみエフエムの送信所に挟まれている。また県域ラジオも、多くの地域で鹿児島の民間ラジオも聞こえる。つまり、エフエムたつごう以外に、ラジオ電波の選択肢があるエリアなのである。

③地形的に、難聴地域がある。東シナ海側に荒波といわれる地域を抱えている。山を背にしたその地域は電波が届きにくい。電波が龍郷町全域をカバーできていないのである。

現在、エフエムたつごうでは、島域ラジオとでもいう性格をもっているあまみエフエムは放送されていない。そこは島の他の3局とは大きく異

なっている。番組編成も、独自の編成を工夫している。

エフエムたつごうは以下のような番組で構成されている。

・自主番組①（行政情報）
・自主番組②（局が独自に制作した番組と、ボランティアの番組）
・音楽番組（この比率は高い）
・MBC とエフエム鹿児島の番組（エフエムうけんやエフエムせとうちと同様）
・エフエムうけん・エフエムせとうち共同制作番組（それぞれ 30 分）
・自動の音楽リクエスト番組（独自で開発したプログラムで、ネットから曲をリクエストすると放送されるシステム）

番組構成の大きな特徴は、通常の民間コミュニティ FM が設けている、朝・昼・夕方のいわゆる情報系の帯番組がないことである。情報系のトーク番組ではなく音楽番組の比率が高いのだが、安定した経営基盤があることがそうした編成を可能にしているともいえよう。いろいろなジャンルの音楽番組とボランティア自主番組、そして鹿児島の民放ラジオが番組の 3 本柱となっている。

自主制作番組のうち、局が自前で制作しているのが金曜日の 15 時半から 30 分間生放送で流されている「わん week たつごう」である。（ちなみに、わんは、奄美の島口で自分＝我のこと。one と我をかけている。）

その他の自主番組は、15 時半と 17 時半から 30 分間ずつ放送されるボランティアの番組である。それぞれ夜 20 時と 22 時に再放送されている。つまり平日は、一日に二つの自主番組が放送されている。医師、紬会社の社長、役場の職員、新民謡歌手など多彩なメンバー 15〜16 人が番組を担当している。それぞれゲストなどを呼ぶことも多い。

ボランティア番組には、新民謡歌の道しるべ、まちゃこの部屋、136 の趣味趣味音楽、じいちゃんのちょっといい話、ちいちゃんのサブカルちっく、Let's ドラゴンちゅ、ワンシーの放送委員会、なつかしゃわきゃ島の唄者、あっちゃんの医療コーナーなどがある。

事務局長の福田祥子氏は、エフエムたつごうの番組のあり方として、「龍郷町にこだわっていく」ことを強調する。あまみエフエムという全国的にも有名なラジオ局の隣で、普通のコミュニティ FM の原点にこだわるという選択でもあろう。

考え方によっては、生活圏域のなかであまみエフエムと可聴域が重なる住民にとっては、二つ地元ラジオの選択肢があるということになる。しゃべりが好きならあまみエフエムを聴くだろう。そのしゃべり方が好みでなかったり、ラジオに音楽だけを期待するならエフエムたつごうを聴くかもしれない。すぐリクという番組は、音楽をネットからリクエストして、それが電波で放送されるという独自に開発したシステムによる番組であるが、若い人に人気があるという。

音楽も、J ポップだけではなく、島口ラジオ体操、島唄、新民謡、島アーティストと島にこだわった番組も多い。また懐メロやクラシックもあり多彩である。町民によるボランティア番組でも新民謡や島唄の番組があるので、それを聴く人もいるだろう。その意味では、あまみエフエムとは異なるもう一つの選択肢のラジオとしてのあり方を工夫している姿が浮かんでくる。

くりかえすが、立地と経営という視点からみれば、エフエムたつごうは日本の大都市郊外型のコミュニティ FM 同様に、有利とは言えない場所で開局したコミュニティ FM 局の一つである。しかし、沖縄でも那覇に隣接する都市のコミュニティ FM の中には、地域密着に徹し、充実した放送内容と優れた経営を誇っている局も複数ある。エフエムたつごうの優位さは、奄美通信システムというパートナー企業（親会社）が運営をしっかりと支えていることである。あまみの中のもうひとつの民間ラジオが、これから更にどのように地域に定着し、存在感を出していくのかスタッフの挑戦が続く。

小括：かたる・つながる・つくる・ひろがる

奄美大島にある四つのコミュニティFMを紹介してきた。すでに述べたように、面積は沖縄島の6割もあるとはいえ、奄美大島という人口6万人余りの島に、コミュニティラジオ局が4局もあることは驚きである。どうしてそうしたことが成り立つのかは島外の人には不思議でもある。NHKは「新日本風土記」で、奄美大島を日本一土俵が多い島として描いたが、人口比で見ると、奄美大島は日本一ラジオ局が多い島なのである。

ラジオの島のメディアの特性もまた、これまで同様に四つの特性でまとめてみることが可能だろう。

〈かたる：地域のメディアには、島語りの位相がある〉

奄美のラジオ局は、まさに“声”と“ことば”を通して直接的、間接的に奄美語りをつづけている。語りの中では奄美という発話や、宇検、瀬戸内、龍郷など自分の地域の地名の発話が極めて多いことになる。地域を表象する素材や象徴、エピソードなどを盛りだくさんに取れ入れて地域を語る。声は、文章を比べれば、はるかに〈身軽さ〉と〈機動力〉をもって地域を語ることができる。ラジオというメディアは、〈身軽さ〉と〈機動力〉のメディアだからである。そうした直接的な島語りをするラジオは、すでに指摘したように〈間接話法のメディア〉でもある。ラジオ自体は、〈間接話法のメディア〉だというのは、多くの場合ラジオ局のスタッフが文化コンテンツをもった発信者であるわけではなく、他者を通じて文化・主張を語っているメディアだからである。それ故、ラジオは誰にでも開かれた地域のプラットフォームになる。政治的立ち位置、階層、性差、年齢などを超えて、人々の〈結節点〉になるメディアなのである。個々の局外の番組担当者やゲストを通じて、島は語られていく。メインパーソナリティも、さまざまな出来事や他者の語りや活動などの紹介を通じて情報を発信している。名パーソナリティは、他者の語りを引き出す達人、つまり間接話法

の達人でもある。

〈つながる：地域のメディアは、多様なベクトルで人と交叉する〉

地域のメディアは地域内だけのネットワークでなりたっているわけではない。発信・受容される情報のやりとりも地域内の地産地消ということではない。

たとえば、あまみエフエムの設立には鹿屋のコミュニティ FM との関係が役立っていた。奄美豪雨災害におけるあまみエフエムの活躍には、あまみエフエムと鹿児島の MBC 放送局や東京キー局との日常的関係、個人的ネットワークが作動していた。

エフエムうけんが MBC を無償で取り入れて放送している背景には、村と村内にある MBC の養殖事業との連携関係や、奄美通信システムと MBC との日常の関係がある。今では、鹿児島の民放から奄美への挨拶のような語りが放送されたり、奄美と繋いだ放送が鹿児島で行われたり、MBC が島番組をつくったりするような関係が生まれている。ラジオ放送のコミュニケーションにおいても、島内の地域メディアが島内だけのつながりで成り立っているわけではない。番組も人も交叉している。

〈つくる：地域のメディアは、文化の創生と結びついている〉

メディアは文化装置であることを繰りかえし指摘してきた。あまみエフエムがまさに奄美の文化ムーブメントの旗手のような活躍をしていることも紹介した。島口、島の音楽を前面に出しての番組づくりは全国的にも高い評価を得ている。

他のコミュニティ FM 局も、島文化の発信をストレートに表に出さなくとも、肩の力を抜いて島ラジオの魅力を発信している。各局の番組には、島唄、新民謡、島口などの要素は盛りこまれている。島唄や島の余興文化を体現するような番組に加えて、島で生活する人々の普通の趣味の世界もまた現代の奄美の生活文化の一つのシーンである。ラジオはまさに語りの

メディアである。あまみエフエムのように島を代表するラジオとして、正面から奄美の文化を強く語るメディアもあれば、日常の放送を通じて、奄美の日々の生活文化を語り紡いでいるコミュニティ FM もある。それぞれのコミュニティ FM が、その文脈に応じて、奄美の文化発信をしていることは確かである。固有の文化をもつ奄美では、日常の放送の語りが自ずと奄美文化色を帯びることになる。奄美という、豊かな文化に恵まれた島の特徴でもある。

〈ひろがる：地域のメディアは、事業を拡張する可能性をもっている〉

あまみエフエムは、イベント事業にも熱心なメディアである。他のラジオ局はイベント力は強いとは言えないが、エフエムたつごうなどは親会社の力もあり十分なポテンシャルを持っている。

コミュニティ FM 局に限らずラジオはいまや漫然と放送だけしていればよいという時代ではない。多様なかたちでの放送を通じて、また放送外の事業を通じて、ラジオ局の存在自体の可視化が強く求められている。音楽消費がパッケージ販売・購入よりも、ライブイベントによる消費にシフトしてきているように、ラジオもよりイベントメディア化しつつあるともいえよう。あまみエフエムは、ライブハウス発のラジオ局ということもあり、まさにそうした情報消費の変化に対応したラジオ局でもある。

防災機能もまた事業のひろがりである。あまみエフエム以外のコミュニティ FM の場合には、そもそも防災戸別受信機の代わりという側面があり、防災放送という拡張機能が組み込まれている。それもまた事業の拡張の一側面であり、ラジオの存在意義を高めている。

※　　※　　※

最初に指摘したように、こうしたコミュニティ FM の島として注目される奄美なのだが、奄美の島語りは、あまみエフエムの華々しい活動だけで理解されるべきではない。確かにチーム麓事業の一翼を担うあまみエフエムの事業デザインは輝いている。それを率いる麓憲吾氏という〈文化媒

介者〉の資質やセンスが遺憾なく発揮されているからだ。

そのことを評価した上で、さらに奄美には他にも多彩な〈文化媒介者〉がいる。本稿の中でも、奄美通信システムの椛山氏や宇検村の渡氏の存在を描いたのは、そうした〈文化媒介者〉の裾野がひろい島であることを紹介したかったからである。注目すべきコミュニティ FM 局がある島が奄美なのではなく、奄美という注目すべき文化豊かな島の中で活躍するメディアの一つとしてあまみエフエムがある。日本一ラジオが多い島は、そうした視点から理解されるべきだろう。

■付記

本稿は、科学研究費（基盤研究 C）、研究課題名「奄美における文化の〈メディア媒介的な伝承・創生〉とアイデンティティ再生の研究」（課題番号 16K02345、分野：人文学、分科：芸術学）、研究代表者：加藤晴明（中京大学）、共同研究者：久万田晋（沖縄県立芸術大学）、川田牧人（成城大学）、研究年：平成 28 年度～30 年度、に基づいた研究成果の一部である。

■注

1）コミュニティ FM はもともと物語性の強いメディアである（加藤晴明、2005）。地域に密着した情報発信、地域を元気にする情報メディア、災害メディア、市民参加のメディアなどの語彙とともに、その開局自体がいわば美しい物語として報道されてきた。マスメディア報道だけではなく、研究者もまたそうした先進事例の物語を強く求めてきた。そうしたなかで、明確なミッションをもって島口復興と島の文化を発信し続けているあまみエフエムが注目されるのは当然でもあろう。あまみエフエムは、ラジオや地域メディアの研究者なら必ず訪れたいと思うような、いわば聖地巡礼の構図を引き起こす魅力要素に満ちている。

2）文化ムーブメントは、「文化運動」と書いた方が適切なのだろう。しかし「運動」という語彙は、どうしても社会運動につらなる語彙となることから、本稿では、ムーブメントという語彙を使う。コミュニティ FM は、多くの研究者に市民メ

ディア運動、NPO 運動の旗手として期待されてきた。そうしたマスコミ批判運動、マイノリティの市民運動的な位置でコミュニティ FM を捉えることは、全国 300 以上あるコミュニティ FM のメインストリームを捉えることにはならない。

3）この点でも、NPO 放送局にマスメディアのアンチモデルや市民メディアの理想を求める市民メディア運動論や知識人主導のワークショップ型市民メディア論とは起点が異なっている。

4）コミュニティ FM の現場を訪ねて感じることは、放送局の運営には、逆に強い、時には独我的でさえあるリーダーが存在し、そうした有能な指導力が不在の場合には事業がうまく行かないことだ。小さな放送局の濃密な人間関係の現場では、いろいろなかたちの親密な関係や軋轢も生じるが、それは逆にリーダーの強い個性の裏返しでもあると言えよう。通常の企業でもそうだが、情報という形のないものを売る放送という困難な事業は、形式的な合議制システムでは立ちゆかないのかもしれない。

5）例外的に、石垣のコミュニティ FM は、日曜日に 30 分ほど「ゆいゆいやいま日本最南端のコミュニティ FM 局・石垣島の FM いしがきサンサンラジオのスタジオから送る生放送」として、那覇の県域ラジオ（琉球放送）に乗り入れてスタジオから同時中継をしている。これは、沖縄本島にとっても、石垣島が「最南端」のリゾート観光地として位置づけられているから成り立っている特異なケースである。

※　　※　　※

■引用・参考文献

麓憲吾（2003）「島の大人達の遊び」『SWITCH』、Vol.21、No.1

麓憲吾（2010）「日本の離島・我ンキャ（私たち）の中心」松浦さと子・川島隆編著『コミュニティメディアの未来』晃洋書房

麓憲吾（2014）「「あまみエフエム」開局までの道のりとその役割：島のアイデンティティを形成するコミュニティ・メディア」『鹿児島大学生涯学習教育センター

年報』11

古川柳子（2012）「コミュニティ FM 災害放送における情報循環プロセス」『マス・コミュニケーション研究』No.81

鹿児島県地方自治研究書編（2005）『奄美戦後史』南方新社

金山智子（2008）「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達」『Journal of Global Media Studys』（駒沢大学）

和眞一郎（奄美を語る会編）（2005）『奄美ほこらしゃ』南方新社

津田正夫（2016）「島ッチュたちの音楽一揆」津田正夫『みなさまの NHK』現代書館

西村浩子（2001）「方言禁止から方言尊重へ、そして方言継承へ」『ことばと社会』5号、三元社

西村浩子（2001）「語り継ぐことから始まるもの」『それぞれの奄美論・50』南方新社

豊山宗洋（2012）「奄美の島おこしにおける組織づくりの研究」『大阪商業大学論叢』第 7 巻第 3 号（通号 163 号）